

あらた同窓會

平成31年 春季号

平成31年3月25日発行

鹿児島大学農学部
あらた同窓会

電話 099-285-8537

振替口座 02010-2-876



鹿児島大学全景

- 鹿児島大学農学部開学110周年記念特集・寄稿
- 開学110周年三二式典2019年11月23日(土)

薩長同盟 酒プロジェクト

鹿児島大×山口大



黄麴×篤姫酵母

ツガネセンガン×山田錦

5月販売開始

¥2000

700本限定

予約 / 問い合わせ :
satsumanetto@gmail.com



原料の栽培から商品化まで
学生が関わって作った焼酎です

名付け親の
郷原綾海くん
(工学部)



左から
パッケージデザインの
氏原悠香里さん
酒プロジェクトの
佐々木香菜子さんと
梶山萌さん
(農学部)

フルーティな味わい
ロックか水割りがお勧め

(農学部附属焼酎・
発酵学教育研究センター
高峯和則教授)



薩摩熱徒の Story



<https://satsumanetto.info/>



鹿児島大学農学部 D 棟と E 棟間の寒緋桜

平成30年度会費納付のお願い

(会計年度：2018年10月1日から2019年9月30日)

鹿児島大学農学部、鹿児島農林専門学校および鹿児島高等農林学校の卒業生で組織される「鹿児島大学農学部あらた同窓会」(現在まで約2万人の卒業生を輩出し、それぞれが国内外で活躍しています)の運営は会員各位の通常年会費をはじめ、新入生(学生会員)が納付する入会金と会費などを主な財源としています。本会は、農学部と協力・連携しながら、「母校の活性化や在学生への支援を行う」、「地域支部会やクラス会などに極力出席する」等に加えて、会報の発行と頒布を通じて「農学部と同窓会の近況や地域支部会、クラス会の情報などを会員にお伝えする」ととともに「会員相互の交流と親睦を図っていく」こと等の活動を行っております。

開学以来、母校が110年近く築き上げてきた「あらたの輝かしい伝統」を次世代に伝承して行くためにも、同窓会活動に対するご理解並びに積極的な参加と協力を賜りますようお願い申し上げますとともに年会費の納入にご協力をお願い申し上げます。

年会費は2,000円です。同封の振込用紙をご利用ください。

なお、2018年7月に会員名簿を発行いたしましたので、本号は住所判明者全員・(約11,000名)にお届けしています。

鹿児島大学農学部開学110周年ミニ式典(2019年11月23日) 開催のご案内とご出席のお願い

「あらた同窓会報・平成30(2018)年春季号」に記載したように、今年2019年は鹿児島高等農林学校創立(第1回入学式)の1909(明治42)年から110年を迎えます。本号には、それを記念して、「農学部創立110周年記念特集」に多数のご寄稿をいただき、掲載しています。

また、2019年11月23日(土)の「あらた同窓会総会」では、農学部と協力して「ミニ式典」を行うことにいたしました。その際、5年毎に行っている「功労者表彰」も行います。つきましては、会員の皆様の多数のご出席をお願い申し上げます。

詳細については、下記事務局までメールまたは郵便でお問い合わせください。

事務局案内【事務局執務体制】

執務日：月、水、金曜日 10：00～16：00

TEL・FAX：099-285-8537

E-mail: arataikai@mc2.seikyou.ne.jp

住 所：〒890-0065 鹿児島市郡元1-21-24

鹿児島大学農学部あらた同窓会

目次

会長挨拶

今年も同窓を送り、新たな同窓を迎える日がきました	藤田 晋輔	3
--------------------------	-------	---

副学部長（次期学部長）挨拶

ご挨拶	橋本 文雄	4
-----	-------	---

退職される恩師

農学部での 28 年間	岩崎 浩一	5
鹿児島大学に学ぶということ	藤澤 義武	6
仕合わせを感じさせていただいた 27 年間	服部 芳明	7

講演録

パッションフルーツ (<i>Passiflora edulis</i>) における高品質果実安定生産のための 最適環境条件解明に関する研究	島田 温史	8
--	-------	---

支部便り

近畿・兵庫あらた会	藤岡 悦治・柳田 興平	9
佐賀あらた会	池田 茂雄	10
熊本あらた会	川窪 裕二	10
鹿児島支部	南蘭 覚	11

クラス会・グループ便り

F31 同窓会終幕の記	野口 英昭	12
國分禎二先生の米寿を祝う会（育珍会）	田浦 悟	13

学生便り

生物生産学科	園田 大地	14
生物資源化学科	佐々木 優紀	14
生物環境学科	甲斐 礼昂斗	15

恩師のお慶び並びに同窓の訃報		15
----------------	--	----

本部便り	富永 茂人	17
------	-------	----

会報賛助金協賛者及び寄付者ご芳名		20
------------------	--	----

役員名簿		21
------	--	----

会計報告		21
------	--	----

鹿児島大学農学部あらた同窓会会則		24
------------------	--	----

目次

鹿児島大学開学 110 周年記念特集

鹿児島大学農学部沿革	25
我が人生行路を振り返る— 一般教養部、そして農学部—	藤田 晋輔 (林・昭 37 年卒) 26
荒田の学び舎に感謝	前田 芳實 (畜・昭 42 年卒) 27
「恩師、友、だいやめ」	浮津 護 (林・昭 38 年卒) 28
開学 110 周年—あらた同窓会の沿革—	林 満 (蚕・昭 35 年卒) 29
半世紀近くも昔の入学試験の思い出	加藤 高明 (化・昭 52 年卒) 31
鹿児島大学農学部 110 周年に寄せて	坂口 哲夫 (林・昭 49 年卒) 32
近畿・兵庫あらた会のこの 10 年	内田 昭 (獣・昭 25 年卒) 33
	日高 康貴 (獣・昭 37 年卒)
あらた同窓会岡山支部	濱脇 吉乃夫 (農・昭 37 年卒) 35
対岳寮の思い出～「農学ワッショイ」街頭ストームとは何だったんだろう	松岡 尚二 (畜・昭 57 年卒) 36
広島あらた会の 10 年を振り返って	辻野 聡 (林・平 2 年卒) 38
「開学 110 周年記念特集号に寄せて」	山下 修司 (農・昭 56 年卒) 39
鹿児島つれづれ草	川瀬 大三 (農・昭 46 年卒) 40
鹿児島大学と同窓会の絆	東 正隆 (旧姓星子) (総農・昭 38 年卒) 41
あらた時代の思い出	佐野 岩男 (農・昭 49 年卒) 42
開学 110 周年に寄せて～鹿児島市役所支部便り	田中 隆義 (農・昭 59 年卒) 43
敗戦直後の学窓生活ア・ラ・カルト	八幡 正則 (農・昭 26 年卒) 44
回顧	岩元 泉 (旧賛助) 45
私と同窓会	富永 茂人 (園・昭 48 年卒) 46
平成に行われた学部・研究科改組 (特にこの 10 年間の変化)	岩井 久 (農・昭 55 年卒) 47
編集後記	遠城 道雄 49

今年も同窓を送り、新たな同窓を迎える日がきました

鹿児島大学農学部あらた同窓会

会長 藤田 晋輔



毎年のことですが、今年も同窓生を送り出し、新しい同窓生を迎える日がきます。特に本年度は平成最後の卒業生である学部、大学院修士課程を卒業、修了された皆さん、おめでとうございます。これから未知の世界へと飛び出すことになりますが、益々の発展を祈ります。幼稚園から始まった約19～22年間の小・中・高等学校と学校教育を終えられたこと、学ぶ立場から徐々に自己研鑽の課程に進み、最終的に大学（もしくは大学院）の最高学府を終えられました。この間ご両親、ご家族の皆様から大変な恩恵・多くの庇護を受けてこられました。ぜひこの大変な援助に対して感謝の意を差し上げてください。

これまで皆さんは学問はもちろんですが、それぞれの課程における先生方の擁護のもとで「挨拶と感謝の念」を学び、大学では社会人となるべく事柄について多面的に励んでこられたと思います。しかし、学んできたはずの倫理を含む社会道徳の入口行為、すなわち「行動・挨拶・感謝」が出来ない若者が多すぎるように思います。折角、幼稚園、小学校では挨拶と感謝をきめ細かく教えられたにもかかわらず、若者だけでなく、指導者の立場にあるべき50～60代の大人が平然と「受けて当然だから、挨拶・感謝は不要と豪語する」方々を最近多く見ます。驚くことばかりです。大人の世界は相互サポートがあって成立するもので、独りよがりでは生きられません。何処の社会もこれまでの自己研鑽とその成果を活用する機会が多くなりますが、在籍（職）する部署の方針に従いながらも、行うべくき仕事を熟成させ、それぞれの課題に向かって、自分の持てる能力を存分に発揮し、疑問符をつけながらも将来に向けて「磨き」をかけることの努力を怠らないこと、そして指示待ちでなく、常に前向きに処理できる社会人となる事を期待しています。これからは良きにつけ、悪しきにつけ、手取り足取りはありません。場合によっては梯子を外されることもあるのです。世の中は厳しいですが、「あらたの地」で学んだ精神の持ち主であることを念頭に置き、健康に留意され、これまで培ってきた能力を十分に発揮してくださることを期待します。

さて、私共あらた同窓会には、時間を空けることなく4月に平成最後の新入生の皆さんを迎えます。私達の母校は、1909（明治42）年「南方開発を見据えた教育、研究に果敢に挑戦する地である」とする開学の精神・思想のもと「あらたの地」に官立鹿児島高等農林学校として開学しました。その後、鹿児島農林専門学校を経て1949（昭和24）年には「鹿児島大学農学部」となりました。開学時と現在では、時代背景もすっかり変化していますが、農学部正面の建物に「南北600km、これが私達のキャンパス」を掲げ、「地域貢献型の大学」をめざしています。農学部は東南アジアまでを教育・研究の対象範囲として、100年前に卒業した先輩諸侯から在学生まで約20,000名を越える諸先輩の輝かしい伝統を連綿として引き継いでいます。在学中、新入生諸君は学生会員ですが、同窓会では年間にいくつかの在学生向けの企画を組んでいます。今年度も先陣的な発想を組み込みながら、実践的な行動ができる新進気鋭の新入生に役立ついくつかのプログラムが提供されると思います。気軽にご参加ください。

最後になりましたが、あらた同窓会では農学部と共催で今年11月23日（土）「鹿児島大学農学部あらた同窓会総会」当日、ささやかな農学部創立110周年のミニ式典行事を行うことにしました。皆様の御参加をお待ちしています。

今後とも「鹿児島大学農学部」、「あらた同窓会」の発展のためご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

ご挨拶

農学部副学部長

(次期学部長) 橋本 文雄



あらた同窓会、在校生の皆様、こんにちは。平成31年・2019年新春を迎え皆様方にはつつがなくお過ごしのこととお喜び申し上げます。農学部・副学部長の橋本です。このたび次期鹿児島大学学長佐野輝先生より農学部長を拝命いたしました。平成31年あらた同窓会・春季号の発刊に当たり一言ご挨拶を申し上げます。

本年は農学部の前身である鹿児島高等農林学校の開設以来110周年を迎え、また、農学部としては水産学部と連携した大学院「農林水産学研究科」の初年度となります。さらに、佐野新学長を中心とした新執行部体制の初年度となり、新元号へと改元されますことから、新しい門出を祝う大変期待される新春を迎えたと考えるところです。

さて、国立大学が法人化して早15年、本年は第3期4年目となり暫定評価の年となります。この間、農学部は大学評価・学位授与機構より比較的高い評価を受けています。特に、農畜産物生産技術の開発、生物機能の解明と応用、食の安全性確保、自然生態系の保全と修復に関する総合的な課題の分野について、優れた教育研究業績を上げご評価いただきました。今回の第3期においてどのような結果となるか注目されるところです。

農学部は現在、アドミッションポリシーに掲げた学生を国内外から広く募集をしているところですが、その入試状況を見ても予断を許さない状況であり、特に前期日程においては近年、受験倍率の低下傾向が認められます。優秀な学生を確保し質の高い教育研究を行うためにも適正な受験倍率の確保を目指す考えです。また、本年4月1日より大学院農林水産学研究科がスタートします。ICT化等による先進的スマート農畜林水産業を創出する人材や食の安全・品質保証、グローバル化に適応可能な人材の養成等、農水両分野双方の高度な知識を有する人材育成にしっかりと取り組んでいきます。

平成27年度に開始した地域連携ネットワークプロジェクトは、鹿児島県ほぼ全域の行政、現場との連携を強化することができ、引き続き地域を取り巻く農林畜産業の課題を解決するため地域活性化に寄与できる活動を推進します。また、食品安全マネジメントシステム「食品管理技術者養成プログラム」、「焼酎マイスター養成コース」、「林業生産専門技術者養成プログラム」など、社会人教育による地域産業への貢献活動、附属演習林「鹿児島の自然とくらしと林業をつなぐ学びの森拠点」、「大野ESD自然学校」の森林環境教育プログラムを継続し、地域と連携した教育をさらに充実します。

農学部・農学研究科はこれまで「国際協力農業体験講座」など5つの短期海外研修プログラムを実施し、国際感覚の養成、国際協力への理解の推進、各国の農業や開発にかかる問題の修学、外国語コミュニケーション能力の必要性かつ重要性を教授しており、国際社会に貢献できる進取の精神を持った人材を育成しています。加えて、本年4月1日開始の大学院農林水産学研究科においても、さらなる教育研究の国際化・国際的人材育成を推進するため、本学が実施する事業「大学の世界展開力強化事業・三極連携COIL」と協調し、国内のみならず国際的に活躍のできる人材を育成します。

鹿児島大学農学部は先駆的教育研究成果を後世へ伝え、優れた人材を輩出する使命と共に、新しい時代へと躍進しなければなりません。同窓会の皆様方のご協力をいただき、これらの目標を達成すべく取り組んでいきたいと思っております。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

農学部での 28 年間



農林環境科学科 岩崎 浩一

平成3年4月に農学部へ赴任して28年間お世話になりました。あっという間に過ぎた日々のもありますが、思い返してみるとやはり多くの人と出会い、様々な出来事を経験させて頂いたなと改めて感じているところです。初めて農学部のキャンパスに足を踏み入れたときに目にした道路の隅々に残る火山灰がいまでも印象的で、ここで普通に暮らせるのか、少し不安にもなりましたが、キャンパスから見える桜島の雄大な姿にその不安もかき消されたように思います。鹿大に赴任する前は農業機械メーカーでトラクタの設計開発の仕事をしていたこともあり、生物生産学科の農業機械学研究室で仕事をするようになりました。当時の研究室には、改組前に入学した農業工学科所属の学生がいました。そのため、隔週で行われる生物生産学科と農業工学科の両方の学科会議に出席していました。初めての学科会議では、諸先輩の先生方を前にして、自分が学生として面接を受けているような緊張感がありましたが、会議の議論が進むうちに緊張が解けるのを感じることができるようになっていきました。私は大学を卒業後、思いの外、長い間大学院生（いわゆるオーバードクター）でありましたので大学での教員の仕事についてある程度理解しているつもりでした。しかし、実際に教員になってみて想像していたのと違ったのは、会議の多さでした。大学での教員の主な仕事は、教育・研究・運営の3つに分けられると思いますが、ことのほか運営に時間を割かなければいけなかったことに驚きました。その後は、徐々に委員会の数も減らされて来ていると思いますが、一方で特に最近は教員の数も減らされていて、なかなか改善されているとはいいがたい状況かと思います。次年度からは農学部教授会の回数も減らされるようですし、メリハリのある効率的な運営体制に向かうものと期待しています。

この28年の間に、農学部では3度の改組が行われ、私の所属するコースや、研究室の名称も変化し、現在は農業環境システム学研究室となっています。名称に「環境」の名称を使うようになり、教育・研究内容もメカニク的な内容から「農業と環境」に関わる、例えばバイオマス資源の利活用や植物工場などのテーマを取り入れるようになりました。研究室に所属するの学生も以前はほとんどが男子学生であったものが、最近は、女子学生のほうが多いくらいに様変わりし、卒業生からは驚かれることが多くなっています。

このところ、農学部の広報に関わる仕事をさせて頂いていますが、受験生向けの説明会に出かけたり、高等学校への出前授業や学部説明会、スーパーサイエンスハイスクール指定校からの研究相談などで高等学校を訪問する機会も多くありました。高校生や高校の先生方と接する機会が増えていて、色々な話をしていますが、高校生が将来を考える際の参考になっていれば良いなと考えています。最近、「スマート農業」という言葉を良く耳にするようになりました。農業にスマートという言葉が付くことで高校生にも良い感触を与えているようです。高校生からも、スマート農業について質問を受けますが、ロボットトラクタなどは、テレビドラマで取り上げられたこともあり、「スマート農業」は農業のイメージアップに貢献しているような気がします。イメージがきっかけであったとしても、農業の将来を支える志を持った学生が農学部へ入学してくれてきたらと願っているところです。「農・食・環境」と農学部の教育研究分野は広がりを見せ、社会からの期待が高まっていることを感じます。これからの農学部が、その期待に応え、存在感を増していく姿が目に見えそうです。

鹿児島大学に学ぶということ

農林環境科学科 藤澤 義武



私の社会生活は1ヶ月の研修を経て秋田営林局（現東北森林管理局）の作業課から始まった。担当区主任を含め、3年間で東北の現場で過ごしたのち、4年目にしようやく研究職に就くことができた。豪雪で屋根まで雪に埋まった担当区事務所から水戸へ赴任した私は、燦々と輝く4月の太陽にしあわせを感じたものである。なぜか赴任当日に人事の希望を聞かれ、南に行きたいと答えた。南なら赤道を越えても良いのか？とさらに突っ込まれたのだが、その後、何度も赤道を越えることになろうとは。しかし、そのおかげもあってか、その後は北に向かうことなく茨城県と熊本県の間を行き来しながら31年を過ごし、ここ鹿児島大学にお世話になることとなった。鹿児島はワシントンヤシやフェニックスの類がそこそこで南風になびく、まさにトロピカルであった。そして、南国交通、南国タクシー、南国ビル、南国不動産、南国…と「南国」があふれていた。暖かく雨量も多いから、樹木は良く育つ。幹まわりが日本一の蒲生の大クスにはじまってあちらこちらでクスやシイの大木を目にする。そんなものだから、私は一年の大半を掛け布団無しで過ごしている。こんな環境が人間に悪いはずが無く、穏やかな心になるであろうことは疑いがない。鹿児島へは車で移動してきたのだが、鹿児島の交通事情は北関東とひと味違った。混んだ道での車線変更にストレスを感じることがないのだ。ただし、そうした思いやりへの甘えが高じてか、信号が赤に変わっても交差点への進入が続くのは困ったものであるが…。

2018年、鹿児島は明治維新150周年でもりあがった。我が国が近代に突入するきっかけとなる革新の火種の一つが九州にあり、薩摩はその中心にあった。アジアに接し、唯一世界への窓口が開かれていた九州では、欧州の脅威に対しては怒り・恐れなど感情的な反応では無く、冷静に捉え、さらには改革の必要性を肌で感じる事が出来たのであろう。鹿児島は中央から離れてはいるものの、いまでも人々は世の動きに敏いように感じる。TVやネットのおかげだけではない、アジアは身近にあり、そこから大型クルーズ船等での来訪も多く、その動きを肌で感じる事ができる。それは、南九州におけるスギ・ヒノキの輸出の盛り上がりにも反映されているように思う。スギ林に恵まれ、アジア諸国の経済発展を肌で感じる事の出来る地の利があつてこそできた発想ではなかろうか。外に向かっては開かれているが、中央からは距離がある。だから、中央の常識にとらわれることなく、新しいものには敏感に反応できる。しかも、降灰を除いてはストレスフリーの環境にある。いや、降灰すらものんびりし過ぎないようにと天の配剤なのかも知れない。さて、鹿児島大学に目を移すといわゆる地方大学の中では9学部を擁する大きい大学である。しかも、3000haに及ぶ演習林（旧帝大を除いて最大）のほか、農場、研究所などの施設が県内に広く点在する。注目すべきは新幹線の駅から歩いて20分に位置し、人口60万の鹿児島市の中心市街にも近いと言う恵まれたキャンパス。どうだろうか、これほど全てに恵まれた環境にある大学はざらにはないだろう。しかも、鹿児島には亜熱帯を含む南北600kmにも及ぶフィールドがある。しかしながら、それを意識できる学生は少ないのではなかろうか。学生諸君には鹿児島大学、さらには鹿児島の恵まれた環境を活かし、どっぴりとそれぞれの学研生活に浸って欲しいものである。わずか数年の鹿児島生活者が言うのも何であるが、すばらしさが普通になってしまった鹿児島人に代わり、あえてよそ者が語らせていただいた次第である。

仕合わせを感じさせていただいた 27 年間



農林環境科学科 服部 芳明

この時期になると毎年思い出す歌があります。一つは「春なのに」です。最近は「糸」です。いずれも中島みゆきさんの作詞作曲です。「糸」のリリースは1992年。私が鹿児島大学に赴任してから2年目です。改めてこの歌を聴き直すと、「同窓会」そのものを歌っているのではないかと聞こえてきました。

昨年(2019)の11月、たまたま27年前に出会えた学生諸君がこじんまりした慰労会を開いてくれました。多忙な年度末を避けたいという意図のようでした。学生諸君は毎年毎年巣立っていきます。学生諸君同士の面識は長くて前後2年間くらいしかありませんが、横のつながりは広いようです。これは長い横の糸です。3月になると巣立ちを毎年見守るのは私たち教職員です。これは何本もの縦の糸です。ほんの少しずつですが確実に毎年毎年新しく布が織られていきます。この出来上がっていく布こそが同窓会であり、布を織りなす1本の縦糸になることこそが鹿児島大学にきた意味であると、昨年(2019)の11月に実感できました。この3月もちょっぴりですが布を織りなすことができます。

鹿児島大学にきた意味は、ほかにもあることに最近気付きました。地域貢献の面と研究の面です。思い出を手繰り寄せると、鹿児島への赴任早々に撮影した一枚の写真にたどり着きます。バックには城山観光ホテルの敷地内にある「レストラン ホルト」が写っています。まだ建築中で、大きな集成材の柱と梁が写っています。左端には30代の若かりし頃の私。その右横にはあらた同窓会の現会長の藤田晋輔先生が、右端には同窓会の大先輩である遠矢良太郎先生が写っています。この写真は、私の講義では大断面の集成材の利用という場面で27年間欠かさず登場してきました。大学の地域貢献や産官学連携は今でこそ当たり前ですが、27年前はまだまだそのような雰囲気にはありませんでした。その先駆けとして、地域貢献とは何ぞやを藤田先生からじっくり学ばせていただきました。また、鹿児島県の職員の方々や県工業技術センターの職員の方々とも様々な活動を共に経験できました。さらに日本木材学会からは地域学術振興賞という栄えある学会賞をおかげさまで授かることができました。

当時は県工業技術センターに所属されていた遠矢先生には研究面であるきっかけを頂きました。それは奄美産のイタジイやイスノキなどの生材(なまぎい)を研究試料として頂いたことです。生材とはまだ乾燥していない木材のことですが、一般には入手困難です。赴任当時は、軟X線を使ったコンピュータ断層撮影装置(CTスキャナ)を木材研究に活かそうと部品を寄せ集めて独自に開発している最中でした。装置の完成直後に最初に撮影した写真が、この生材の乾燥経過を追った生材内部の断層写真です。内部に発生して拡大している割れの推移が綺麗に写っていました。この研究分野からはその後遠ざかりましたが、私の頭の中にはずっと居座り続けました。

鹿児島には地域資源として広葉樹の木材資源が豊富に存在します。残念ながらチップや薪以外には活用されていません。未活用の原因の一つは、内部割れが発生するために広葉樹材を効率的に乾燥できないことにあります。この解決の糸口に、数年前になってやっとたどり着きました。27年前に撮影した断層写真に手がかりがあったのです。昨年(2019)の暮れ(H30.12.25)になってやっとこのアイデアを本学知的財産部門に職務発明届として提出できました。ことがうまく運ばばスギ材も含めた地域資源を宝に変える可能性のあるこの技術を、数年後には鹿児島大学の知的財産として活用いただけるのではないかと狸の皮を思い浮かべています。実はこのためだったのだと、鹿児島にきた意味を27年目にして気付かせて頂きました。横の糸と縦の糸とが織りなす立派な布を夢見ることができ「仕合わせ」を感じさせていただいています。

講演録

パッションフルーツ (*Passiflora edulis*) における 高品質果実安定生産のための最適環境条件解明に関する研究



農学研究科H.26修了 島田 温史
(鹿児島大学大学院農学研究科
学術特定研究員)

私は大学4年生から現在に至るまで熱帯果樹について研究を行い、その中でも主に研究したパッションフルーツで博士号を取得した。パッションフルーツは挿し木繁殖が可能であることや定植1年目から果実が収穫可能であること、作業の負担が少ないことなどから高齢者や女性でも栽培が容易である。また、生果用や加工用として需要も伸びている。そのため近年、鹿児島県や沖縄県などの亜熱帯および西南暖地だけではなく、岐阜県や三重県、千葉県、東京都八王子市などでも栽培され、全国的に注目され始めている。しかし、パッションフルーツは熱帯高地原産であるため、夏季の高温期に開花、結実不良や果皮の着色不良などの高温障害が発生する。したがって、今後さらにパッションフルーツ栽培を拡大するために、栽培に最適な環境条件を解明することを目的として研究を実施してきた。

その結果、温度と光合成特性との関係、成熟期における温度と果実品質との関係を解明し、温度反応に品種間差異があることも明らかにした。さらに、樹体生育および果実生産を安定させ、果実品質を向上させる光環境や土壌水分条件も明らかにした。要約は以下の通りである。

1. 温度と光合成特性との関係：葉のガス交換およびクロロフィル蛍光測定を行うことによって、温度反応やストレスの程度を把握し、パッションフルーツの光合成に最適な温度が30℃であり、35℃以上では光合成能力が低下することを解明した。加えて、高温障害が多く発生する品種は光合成の適温範囲も狭いことが確認した。

2. 成熟期の温度と果実品質との関係：着色開始期の果実を用いて果実成熟期の温度と果皮色および果汁成分との関係について検討した。その結果、パッションフルーツ果実の成熟に最適な温度は25℃であ

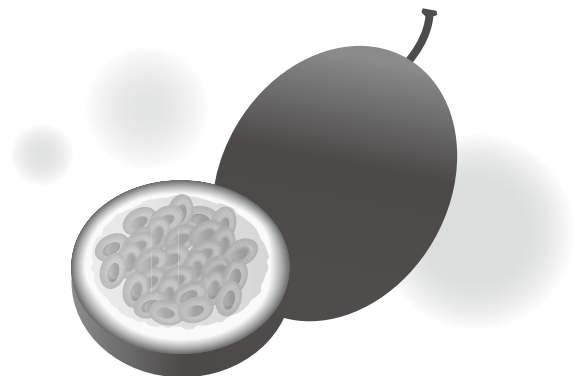
ることがわかった。それに加えて、収穫果実および樹上果実の成熟特性に関する品種間差異も明らかにした。

3. 高温対策としての遮光処理：5月から8月まで遮光処理を行った結果、遮光処理は約30%の遮光までであれば果実品質を向上させるが、約60%以上の遮光では葉の陰葉化も進み、開花も抑制され、果実品質が低下することがわかった。

4. 最適な土壌水分管理：pF1.5以下の土壌水分では根腐れを引き起こすため、pF2.0～2.2を基準に灌水を行い、一時的に乾燥ストレス (pF2.4～2.7) を与える管理をすることで高品質果実の安定生産が可能になることがわかった。

今後は熱帯果樹の栽培生理を明らかにし、研究成果を現場（農家）に還元できるように研究に取り組んでいきたい。

最後に、学位取得までに多大なるご指導とご鞭撻を賜りました多くの先生方、また、9年半という学生生活を支えてくれた家族に、この場を借りてお礼申し上げます。



支部便り

近畿・兵庫あらた会だより

平成30年度近畿・兵庫合同総会の概要

平成30年度の通常総会は、5月27日（日）13時からJR尼崎駅北側のホテル「ホップインアミング」で7年連続して合同総会となりました。

本年度の総会には、鹿児島大学岩井久農学部長（農55）のご臨席をいただいた他、明石市在住の田中慶秀氏（化39）が45年ぶりに出席されるなど総勢17名で和やかに行われました。

はじめに、当会神澤亀貴顧問（前副会長、化19）が昨年12月17日に93歳で、近畿の竹内正郎氏（獣23）が本年1月21日にご逝去されたことから全員で黙祷を捧げた後、兵庫あらた会の日高康貴会長（獣37）が、平成16年度から近畿との合同総会を開催しているが、会員の高齢化や若い参加者も少なく活性化が必要であり、交流・懇親を図って、お互いに連携して同窓会を盛り上げていきたいと挨拶をされました。

続いて近畿あらた会の浮津護前会長（林38）が故清水民敬氏（林38）の7回忌に6名の会員が参加されたことや喜寿を迎えて健康に興味を持つようになり、福祉関係の仕事として福祉草履に加え檜枕の普及に努めておられることを紹介された。

次に、岩井学部長から母校の最近の動きをお話いただきました。

その後、大阪教育大学大学院秋吉博之教授（化55）から『「自然科学」から「科学教育」研究への軌跡』－近畿・兵庫あらた同窓会に支えられて－と題してスライドを使って

①鹿児島大学での寮生活・教育実習や化学基礎研究

②神戸風月堂で公害防止管理者として勤務し同窓会への初参加

③中学校理科教員として神戸市葺合・兵庫教育大学付属中学校での9年間の教育研究・加西市北条中学校で夜間には神戸大学で修士・博士課程を修め、国際教育協力としてケニアで生物の先生を指導

④岡山県就実大学から教育学部創設の為に招かれ6年間在籍、2012年には鹿児島大学での日本理科学会学で発表

⑤大阪教育大学天王寺キャンパスで理科教育学研究室教授、大学院連合教職実践研究科教授として理科の学習指導について論文・著書など多数、特に啓林館の小中学校の理科の教科書の編集に従事などの特別講演をいただきました。

記念撮影の後、14時20分には渡邊幸博氏（獣27）の乾杯の音頭で祝宴に入り、ビールや焼酎「赤霧島」などを酌み交わして歓談し、所崎亘幹事（畜46）を皮切りに出席者全員が闘病体験、健康管理法、趣味、家事・介護、ボランティア活動など近況をマイク片手に語りました。

最後に渡邊氏の発声で「対岳寮第二寮歌」に続き、農学部開学100周年記念CDで練習を積まれた田代善和氏（畜46）の発声で「高等農林校歌」と「北辰斜めに」を合唱し、山下高德兵庫副会長（農37）の閉会の挨拶で16時半に祝宴を閉じました。

なお、来年は5月26日（日）、同会場（名称は「ホテルヴィスキオ尼崎byGRANVIA」に変更）で合同総会を開催の予定ですので、多数の出席をお願いする次第です。

[近畿あらた会・常任幹事 藤岡悦治（農S46卒）]

[兵庫あらた会・常任幹事 柳田興平（獣S46卒）]



佐賀あらた同窓会支部だより

佐賀あらた同窓会では、会則に基づいて毎年総会を開催しており、平成30年度佐賀あらた同窓会総会及び懇親会を平成30年6月9日（土）15時から、佐賀市の「グランデはがくれ」で開催しました。

今回は、佐賀で行っている本同窓会に何度も足を運んでいただいている鹿児島大学農学部あらた同窓会常任副会長の富永茂人先生にご臨席を賜り、今年も元気に出席された大正生まれの大先輩から、法人に勤められている先輩、県庁の農業・獣医・林業関係の職員、果樹農家、今回初めての出席となる平成30年春の卒業生の3名など30名の参加がありました。

総会では、ご逝去された先輩に哀悼の黙祷を捧げるとともに、喜寿を迎えられた先輩への記念品贈呈の紹介の後、平成29年度の活動実績及び決算、役員改選、平成30年度の活動計画及び予算（案）について協議を行いました。

そのうちの役員改選では、新しく山下会長と女性会員2名を選出するなどの新役員体制が承認され、新役員体制を中心に今後の佐賀あらた同窓会をさらに盛り上げていくこととなりました。

議事終了後は、富永先生からご挨拶と母校の詳しい近況などを説明していただき、出席者は熱心に聞き入っていました。富永先生には、ご多忙の中、時

間を割いていただきまして改めて感謝申し上げます。

懇親会では、初めて出席した3名からの自己紹介が行われたり、明治維新150年に当たって開催されていた佐賀出身の大隈重信らの偉人を紹介する幕末維新博覧会のことや、鹿児島に関してはNHKで放映されていた「西郷どん」のことなど、両県の明治維新を振り返る話も出て、和気あいあいと賑やかに芋焼酎などの酒を酌み交わしました。

最後は、恒例の「鹿児島高等農林学校校歌」「第一寮歌“黒潮岸に”」の参加者全員の合唱を行い、ますますの同窓会の発展を祈念して会を閉じました。次回の佐賀あらた同窓会総会及び懇親会は、平成が終わり新元号になって初めてという節目の開催となる予定ですが、今後も多数の出席者の参加で、盛り上げていきたいと考えています。

〔佐賀あらた同窓会・幹事長 池田 茂雄（環H6卒）〕



熊本あらた会総会を開催

第49回熊本あらた会総会を、平成30年11月9日午後7時より、アークホテル熊本城前で開催いたしました。

議事に先立ち昨年ご逝去された方に、謹んで哀悼の意を表し黙祷を捧げました。総会は東正隆会長（総合農学科・昭和38年卒）の挨拶から始まり、鹿児島大学農学部長の岩井久氏から御来賓の挨拶を賜りました。

提案された平成29年度会務報告及び収支決算、平成30年度会務計画及び収支予算について、事務局より報告と説明がなされ、異議なく承認されました。総会の後、35名で懇親会が開かれ、母校の懐かしい話や、年齢・業種を超えた新たなつながりに華が咲き、笑顔あふれるすばらしい会となりました。会の終わりには、肩を組みながら北辰斜めを大合唱し、万歳三唱で締めくくり、盛会のうちにお開きとなりました。

今年は、熊本あらた会もいよいよ50周年の節目を迎えます。次回の総会は、たくさんの方と記念に残る会にしたいと思っています。どうぞお仲間を一人でも多く誘い合ってご参集下さい！

〔熊本あらた会・事務局 川窪 裕二（資H16卒）〕



鹿児島支部だより

鹿児島支部は、鹿児島市郡の機関・団体の職域からなり、昭和28年9月に設立した歴史ある支部で、現在11の職域に会員43人とあらた同窓会最大の支部と自負しております。

鹿児島支部最大の行事は、毎年10月の第3金曜日の開催となっています支部総会とボウリング大会で、本年度は平成30年10月19日となりました。

総会に先だって開催しますボウリング大会は、平成18年度からの恒例行事となっており、今年は7つの職域から43名に参加をいただき、天文館のT-MAXボウルで開催しました。男女別の個人対抗戦のほか、16レーンに分かれてのチーム対抗戦で、総会の後の懇親会の中で表彰式を行います。同窓の仲間とのボウリングは、和気藹々な中にも熱のこもったものになります。スベアやストライクを取った後のハイタッチ、それに対する歓声など、下の写真で分かっているように本当に楽しんでいただきました。



総会は、昨年に引き続きボウリング会場に近いホテルパレスイン鹿児島で開催しました。総会には7つの職域から46名、上は昭和48年卒から下は平成29年卒までと、20代から70代と幅広く参加いただき、盛大に開催することができました。まず、本年度から新任となった伊藤真吾支部長（園S53卒）のあいさつに始まり、本部からお越しいただいた冨永茂人常任副会長から来賓のごあいさつをいただき、さらに鹿児島大学の橋本文雄副学部長から学部の状況を含んでごあいさつをいただきました。議事は支部長を議長として、

- ①平成29年度事業実績及び収支決算について
- ②平成30年度事業計画及び収支予算案について
- ③新役員について（報告案件）

の2つの議案の提案と1つの報告をしました。審議

の結果、原案どおり承認いただきました。

総会の後の懇親会は、前年度をもって退任された前支部長の佐野岩男さん（農S49卒）のあいさつと乾杯の音頭で始まりました。自由席の会場は、旧知の仲間が集まった円卓、職域で集まった円卓、いろんな年代が交流する円卓などがあり、明るい声が飛び交う楽しい雰囲気の中で交流が図られました。途中、ボウリング大会の結果発表を行うと、そのたびに歓声があがり、話がはずみます。今年は、関係者からのいただきもののお裾分けの抽選会も行い、多くの方に賞品が当たったことから、さらに場も盛り上がり、話がはずみました。

最後は、個人戦で優勝した鹿児島大学の平瑞樹さん（農工S62卒）から懇親会を万歳三唱で締めてもらい、楽しい1日が終わりました。

今後も、あらた同窓会の最大の支部としての自負をもちながら、多くの方が参加して交流が深まり、あらた同窓会がますます発展するよう活動を展開していこうと思っております。

〔鹿児島支部・常任幹事 南蘭 覚（農S56卒）〕



クラス会・グループ便り

F31同窓会終幕の記

われわれは、卒業して62年過ぎ85歳となる。就職氷河時代の卒業だったから自活出来るまで長い時間が必要だった。結果としてF31同窓会の始まりは卒後25年目、以後5年おき3年おき2年おきとなって合計12回、開催地は同輩が居住する鹿児島、熊本、長崎、福岡、山口、静岡の各県を巡った

前回の久留米では、次の会場選びに当たって6年前の熱海に続いてみんなで富士山をもう一度見ながら最後の同窓会にしようと決めた静岡だった。あれか2年の間に折田靖弘氏と田上栄一氏に旅立たれ、合わせて6人が鬼籍に入った。結局、今回9人参加して5月10～11日の開催となった。

今回同窓会最初の見学は、江戸幕府最後の将軍徳川慶喜邸にあったダンマルジュだった。恩師初島住彦先生同定による全国2例目、静岡市街地にある樹齢150年ほどの高齢木を見た。所有者の安池さんは静岡県を代表する林業家、鹿児島大学OB一行として案内下された。1例目は、長崎県出島にあって同県天然記念物に指定されている。次に訪ねた駿河の薩摩土手は、静岡市街地の西部を流れる安倍川と藁科川の合流点にあって、薩摩義士伝の宝暦治水工事より1世紀半前に施工されていて、皆さん驚きだったようだ。静岡市議会が現地界隈の市道を「さつま通り」と議決したのは昭和39年、その一角に鹿児島県人会が「薩摩土手之碑」を建立したのは平成元年のことだった。そして、道順に近い上記の田上家を訪ね、ご家族に迎えられて焼香できた。

翌朝は晴天に恵まれた。世界文化遺産の三保の松原と日本平山頂から冠雪の富士山を仰ぎ、8年前のバスでの富士登山と合わせ日本一の霊峰を堪能し、念願通り同窓会最後の拝礼がかなった。

同窓会の醍醐味は、お国言葉が飛び交う歓談につける。いとも簡単に学生時代にスイッチバック、相手を次々ととっかえ話はどこまでも続いてとどまることを知らない。F31同窓会終幕の場が鹿児島ならず遠く離れた静岡とて同じとばかり全員参加の当意即妙に笑いと拍手が止まず、小さな声で話してくれた熊本地震と北九州豪雨の惨状に被害を受けた同輩の心情を知り、三保の松原を歩けば海浜植物からクロマツ林保全対策まで林学科卒の片鱗を見た。

談笑の対極には参加したくても出来ない級友が10人いて、参加者それぞれも何時そこへ移行してもお

かしくない年配となっていることである。斯様な背景をおもんばかり、全員への呼びかけ同窓会は今回で終わり、今後は有志に任せることとした。斯様に盛り上がり仲間の手を強めたのは、同窓会が然らしめた結果と衆議一決、密かに準備した静岡サプライズの感謝状に各々サインして当該者をねぎらった。そのひとり吉村氏への感謝状は添付のとおり、松枝氏は吉村氏のかげがえのない相棒役として、岩崎氏は福岡県森林インストラクター会元会長で樹木医の立場から話題提供を多とした。

別れの静岡駅頭、円陣になるや否や両手を重ねた手玉に力を込めてオオーと雄叫びを上げていた。ホームに各位を見送りながら、次に会えるのは何時になるかと思うとこみ上げるものがあつた。

〔野口 英昭（林S31卒）〕

感謝状

吉村 一郎 大兄

われわれ同窓生が鹿児島大学卒業以来

六十二年にわたり親しく交わり今なお意

気盛んなことは終始世話に当たった大兄

に負うところ大であります

総意に基づきここに金一封を添えて感謝の意を表します

平成三十年五月吉日

あらたF31同窓会

謝

折田 靖弘
市 栄一
瀬戸 俊
松枝 一
岩崎 氏
吉村 氏
田上 氏
安池 氏

國分禎二先生の米寿を祝う会（育珍会）

植物育種学研究室の國分禎二先生の米寿を祝う会を平成30年11月17日に開催しました。

先生は平成9年の退職後、ご郷里の長崎県対馬に移られました。そこで、農学部においてなされてきた農学教育をご自分で実践するお米作り中心にした農業に勤しまれておられます。八十八歳を迎えられるのを機に先生と奥様を対馬から鹿児島にお呼びして、研究室の同窓生でお祝いをするようになりました。この会を企画したのは植物育種学研究室の同窓会で育珍会と申します。文字通り、珍しい物を育てる会です。先代教授の宮司佑三先生が名付けられたそうです。育珍会は始まってから還暦を迎えるまでになっています。そのため、高齢化社会を迎え、退職組、その予備軍の集まりが新たにでき、おせんし（長才）の育珍会と名乗っています。米寿を祝う会はこのおせんしの育珍会が中心となって開催しました。

祝う会は、主賓の國分先生とその奥様、宮司先生の奥様をお呼びし、佐藤宗治先生、一谷勝之先生にご出席いただきました。同窓生は昭和30年から平成9年までの卒業生に声をかけ、62名の出席と45名の賛同を得て開催することができました。出席者の最年長は吉村之宏氏（S30卒）でした。最も遠いところ

からは中国大連から王晶珊氏（MH6修）、最南は沖縄の宜保正雄氏（S53卒）でした。会場の“國分禎二先生の米寿を祝う会”の横断幕は書道部の村田達郎氏（S51卒）の直筆によるもので当日持参されました。菊川明氏（S48卒）の挨拶で開会しました。國分先生へのお祝いの品の贈呈を牧野伸洋氏（S53卒）、続いて先生の挨拶と進み、おせんしの育珍会の会長萩典宏氏（S37卒）の乾杯の音頭で宴が始まりました。久しぶりの同級生との再会に話声も聞き取れないような状態に会場は大盛り上がりとなりました。お祝いの言葉を学生時代の思い出をこめて永富成紀氏（S41卒）と上田實氏（S42卒）により行われました。中段で、村田達郎氏（S51卒）により若かりし頃の國分先生の写真と対馬の先生のご自宅を訪問した際の写真がスライドで紹介されました。ご自宅の写真が紹介されると國分先生自ら壇上に上がり、部屋の間取りを説明する一幕もありました。2時間の会もあっという間に終わり、瀧川憲洋氏（S52卒）による締めの挨拶となりました。最後に空手部の平井正明氏（S52卒）による巻頭言、全員で北辰斜めを肩を組み、高らかに歌い上げました。

國分先生への感謝の気持ちと同窓の良さを感じた1日になりました。

〔田浦 悟（農S59卒）〕



学生便り



無知の知

生物生産学科 家畜生産学講座

家畜管理学研究室

園田 大地

早いもので大学生活4年間が終わろうとしています。大学1～2年生のときは自由な時間も多く、見るもの、聞くものがどれも新鮮で目的はあまり考えずに面白そうなことは何でもやってきたと思います。もちろん、そのおかげで短期間ではありましたが、海外にも3ヵ国（ミャンマー、中国、韓国）行って国際協力や異文化理解・交流などについて学ばせていただく機会にもなり、日本の良さや問題点などを客観的に考えられるようになったと思います。また、20歳の成人式の時には地元の成人式の実行委員長を務め、市役所の方々など社会人と関わり、多くの方々の前でスピーチするなど貴重な経験をさせていただきました。しかし、目先の事にとらわれて物事に対してなぜやるのかという目的が明確でないままやってしまったと反省しています。

3～4年生になると研究室にも配属され研究室の行事や実験、卒論に取り組むようになり、研究室中心の生活になりました。特に、卒論に取り組むなかで自分の無知や考えの浅はかさについて痛感しました。卒論テーマを考えるとときも研究目的が漠然としていて、実験計画もなぜその試験が必要なのかなど突き詰められておらず、先生方にも卒論の取り組み方について指摘していただきました。これまでの自分の物事に対する姿勢や取り組み方の甘さが反映されたと感じました。それからは実験をするときはデータを取るために毎日コツコツと行い、また、何のために行うのか目的を意識しながら取り組みました。そのおかげで、少しではありますがこれまでの自分より考えて行動するようになったと思います。

大学生活で感じたことは若いからこそ知識も実力もない自分に焦り、目先の事にとらわれがちですが、自分の無知を認めて目の前の小さなことをコツコツと行える人が大きく成長するのかもしれない。



大学生活を振り返って

大学院生物資源化学専攻 生命機能化学講座

応用糖質化学研究室

佐々木 優紀

大学一年のとき先輩の話を聞きながら、学生生活でできることの多さと自由さに心躍らせたのを覚えている。私は、大学三年から修士一年に飛び級制度を利用して進学し、現在、博士課程への進学を考えている。飛び級？博士課程？なんだその世界…？と大学に入りたての私が読んだらそう思うだろう。まだ大学生活を残している人に向けて、一つ選択肢を増やすことができたらいいなと思う。

大学生活を振り返ると、自分のしたいことができる時間が贅沢にあったと感じる。海外派遣やアルバイト、趣味の時間などもそうだが、勉強に充てられる時間も十分にあった。大学でもテストこそはあるものの、自分の興味がある部分を徹底的に調べられる時間があり、どんどん本筋から逸れていくことも多かったが、自分の好奇心のむくまに勉強できたことはすごく自由で楽しかった。

大学三年の夏に飛び級制度を利用できる成績であることを伝えられ、修士に行くか進学するか悩んでいたが、一年早く修士を卒業し、働けるのは魅力的だと思い進学を決めた。大学院を卒業したら就職。と決めていた私だったが、初めて参加させてもらった学会で、自分の発表内容に対して多くの先生方と意見交換できたことが非常に刺激的で楽しく、まだわかっていないことを解明したいと思うようになった。そうすると、飛び級して減った年数が惜しいと感じはじめ、もっと研究をしたいと、博士課程に進学することを決めた。

何がきっかけになるかわからないが、日々の授業や、実験を一生懸命取り組むことによって、私はその中で自分のしたいことを見つけていけたと思う。最後に、好きなことに打ち込める環境を作ってくれた両親、意欲に応じて機会を与えてくださった先生方、楽しく励まし合えた友達に感謝して、これからも決めた道で頑張っていきたい。



『なぜ、なぜ、なぜ』で 生きていく

生物環境学科 森林科学コース

森林政策学研究室

甲斐 礼昂斗

私は短大から3年次編入を通じて、鹿児島大学に入學しました。たった2年しか在学していませんでしたが、一番大変だったのは卒業論文でした。

日本の丸太輸出がテーマでしたが、初めのころは何をすればいいのか分かりませんでした。「近年日本の丸太輸出量が増加している」「鹿児島県の志布志港は丸太輸出量が日本で一番多い」ということは知ってたのですが、何十ページも書かないといけないうのに、この2つだけで何を書けばいいんだろうと悩みました。文献に書いてあったことをただ羅列した資料は薄っぺらいもので、先生方から質問を受けても抽象的な回答しかできませんでした。

月日が経つにつれて、何故そうなのかを調べるの

が研究だと分かりました。何故に対する答えを出すのはとても困難です。確かに今は図書館やネットでは色んな文献を閲覧することができますので、学者が考えた何故に対する答えを探し出せるかもしれませんが、しかし、ほとんどの場合、何故に対する答えは載っていないことが多いです。たとえ答えが載っていたとしても、社会情勢は移り変わるものであり、今の状況でもその答えが通用するとは限らないのです。さらに、何故に対する答えは必ずしも1つとは限らないのです。追究すればするほど、自然に文字数は多くなっていきます。

卒業論文を通じて、「何故に対する答えは1つではない」という考え方が身に付きました。答えが1つとは限らないと考えるのはイライラしてくるのですが、根拠さえしっかりしていれば、自分が出した答えも正しいということでもあります。時々これで良かったのだろうかと不安になることがありますが、そんなときは何故その結論に至ったのかを思い出して、自分の選択に自信を持つようにしています。

恩師・同窓のお慶びならびに訃報

先生の退職・新任・昇任

【定年退職】

- 岩崎 浩一 平成31年3月31日付
(農林環境科学科・地域環境システム学・農業環境システム学分野教授)
- 藤澤 義武 平成31年3月31日付
(農林環境科学科・森林科学コース・育林学分野教授)
- 服部 芳明 平成31年3月31日付
(農林環境科学科・森林科学コース・木質資源利用学分野准教授)

【昇任】

なし

【新任】

- 榮村 奈緒子 平成30年8月1日付
(農林環境科学科・森林科学コース・森林保護学分野助教)
- 大住 あづさ 平成30年9月1日付
(農業生産科学科・食料農業経済学コース・農業経営学分野助教)

受賞

- 那須 袈春(林S31) 平成30年4月29日：平成30年春の叙勲・瑞宝双光章
- 松田 健一(林S34) 平成30年4月29日：平成30年春の叙勲・瑞宝中綬章
- 荒井 啓(旧賛助) 平成30年4月29日：平成30年春の叙勲・瑞宝中綬章

福田 春夫(農S31) 平成30年10月30日：平成30年南日本文化賞

加治屋 勝子(食料生命科学科) 平成30年6月29日：かぎん文化財団賞

池永 誠、川内 智裕、吉崎 由美子、境 雅夫(食料生命科学科) 平成30年6月17日：日本土壤微生物学会最優秀ポスター賞

Jun-Ichi Sakagami, Hibiki Iwanaga, Shin Yabuta(農業生産科学科) 平成30年10月19日：2018年韓国作物学会秋季大会Excellence Presentation Award, 優秀発表賞

Erna Siaga, Jun-Ichi Sakagami, Benyamin Lakitan, Shin Yabuta, Hasbi, Siti Masreah Bernas, Kartika I, Laily Ilman Widuri

(農業生産科学科) 平成30年11月10日：International Conference of Sustainable Agriculture for Food Security and Sovereignty 2018 Best presentation Award, 最優秀発表賞

井之上 弘樹、大塚 彰、井尻 大地

(農業生産科学科) 平成30年10月20日：日本暖地畜産学会第11回長崎大会優秀発表賞

王 子泰、奥津 果優、二神 泰基、吉崎 由美子、玉置 尚徳、丸山 卓郎、小松 かつ子、高峯 和則

(食料生命科学科) 平成30年9月1日：第35回和漢医薬学会学術大会優秀発表賞

内藤 重之、坂井 教郎

(農業生産科学科) 平成30年9月15日：2018年度食農資源経済学会学術賞

門岡 千尋

(食料生命科学科) 平成30年9月21-22日：日本農芸化学会平成30年度西日本支部大会優秀発表賞

宮本 葵

(食料生命科学科) 平成30年10月11-12日：第10回日本醸造学会若手シンポジウム醸造ベーシックサイエンス賞

門岡 千尋、泉津 弘佑、浅井 禎吾、奥津 果

優、吉崎 由美子、高峯 和則、後藤 正利、玉置尚徳、二神 泰基

(食料生命科学科) 平成30年11月15-16日：第18回糸状菌分子生物学コンファレンス企業特別賞いちこ特別賞

上之園 知邑、加治屋 勝子、その他

(食料生命科学科) 平成30年3月1日：桜ヶ丘地区基礎系研究発表会プレゼンテーション賞

中野 拓宜、伍 樹松、坂尾 こず枝、侯 徳興

(食料生命科学科)：ラテンフード2018－第8回食品科学・バイオテクノロジー・食安全学会口頭発表賞

物故者名簿

謹んで哀悼の意を表します

故人氏名	科・卒年	死亡年月日	ご遺族の住所およびご遺族名	
長 勝史	旧賛助	H.30. 1	福岡市博多区美野島1-22-19-601	夫人 靖子
赤井 英夫	旧賛助	H.30. 12.4	東京都目黒区自由が丘2-2-2-804	
岡本 嘉六	旧賛助	H.30. 9.28		夫人
松村 耕助	A.S.23	H.30. 3.19	鹿児島市吉野町9268-1	夫人 敬子
福山 正雄	A.S.32	H.30. 6.19	鹿児島市西坂元町73-12	夫人 洋子
大内山 忠	F.S.22	H.28. 1.	鹿児島県日置市伊集院町猪鹿倉529-3	夫人 サチ
東辻 久雄	F.S.24	H.30. 3.22	奈良県吉野郡川上村東川1982	
市来 孝一	F.S.31	H.30. 7.15	宮崎県えびの市原田3821	
黒木 辰郎	F.S.56	H.30. 10.1	鹿児島市谷山中央7-43-2	夫人 京子
新垣 良公	S.S.12		沖縄県那覇市長田2-25-6	孫 良介
真島 義治	S.S.25	H.30. 3.	佐賀市金立町千布3009	子息 尚弘
上久保 哲郎	S.S.30	H.30. 8.26	奈良県橿原市菖蒲町2-20-8	子息
小原 直久	S.S.41	H.30. 8.30	鹿児島県日置市伊集院町妙円寺1-61-1	夫人 まり子
神澤 亀貴	C.S.19	H.29. 12.17	兵庫県三木市別所町高木154	子息 昌生
鮫島 逸郎	C.S.23	H.30. 2.27	岡山県倉敷市粒浦898-6	
小林 武一	C.S.38	H.30. 9.20	鹿児島市唐湊2-11-26	
松本 桂子	C.S.45	H.15. 6.21	福岡県飯塚市新飯塚24-31	
小寺 謙治	V.S.19	H.30. 7.14	滋賀県東近江市春日町3-17	
宮島 良男	V.S.19	H.30. 2.6	長崎県大村市須田ノ木町820-3	子息
大藪 惇	V.S.23	H.30. 5.14	福岡県柳川市立石791-2	
永田 次雄	V.S.23	H.30.11.12	鹿児島市唐湊4-21-1	夫人 康子
中園 明	V.S.23	H.30. 8.24	鹿児島市星ヶ峯4-35-12	
岩下 彰郎	V.S.30	H.30. 1.30	福岡市中央区地行浜1-4-1	子息 幸一
本村 隆明	H.S.49	H.29. 7.11	鹿児島市皇徳寺台5-31-6	夫人 幸子
上川 広幸	H.S.63	H.31. 1.17	鹿児島市松陽台町70-5	

本部便り

I. 会員名簿の発刊

本会の重要な事業のひとつに「会報および会員名簿の発行」（第3条・第1項）があります。「会員名簿」の発行年についての取り決めはありませんが、過去には3年ごとに発行された経緯もあるようでした。平成18年6月に「会員名簿」を発行しましたので、平成21年は発行予定の年でしたが、ちょうど農学部開学100周年の年に当たり、記念事業実施のために見送られましたが、平成24年には会員各位のご協力により6年ぶりに「会員名簿」を発行いたしました。しかし、その後は同窓会経理状況の悪化もあり、3年ごとの「会員名簿」発行は出来ませんでした。

しかし、今回会員各位のご協力（「会報賛助金」）や「あらた同窓会報」や「会員名簿の印刷経費」に関して相見積もりを行うことによって「あらた同窓会会計にしめる印刷経費」を節減することができ、平成30年7月に5年半ぶりの「会員名簿」の発行を行いました。今回の「会員名簿」作成にあたっては、株式会社サラトと個人情報の保護に関する法令を遵守した取り扱いを含む業務委託契約を締結し、名簿編集・印刷・発刊業務の一切を委託しました。5年ぶりの「会員名簿改訂版」の発刊にあたっては、住所等の調査を行い、充実させるとともに、時代に合わせてA4版として見やすく配列しました。

今回の名簿発刊にあたって、鹿児島高等農林学校開学以来100年以上の卒業生総数は20,162名（うち住所判明生存者は11,305名、物故者4,395名、住所不明者4,462名）であることが判明しました（平成30年5月16日現在）。

この新しくなった名簿を同窓生相互の交流や親睦、在学生諸氏の就職活動等に活用されることを期待いたします。なお、住所不明者の調査は現在も継続しております。情報をご存知の方がおられましたら、差し支えない範囲で事務局までお知らせいただきますようお願い致します。

先述のように、印刷会社では名簿は全て「予約販売」としましたが、あらた同窓会事務局には残部が一部あり、販売可能です。購入希望者は事務局にご相談ください。

II. 事業及び会計に関する報告

1. 平成30年度総会

平成30年度総会は、平成30年11月23日、15:00から19:00、鹿児島市上荒田町のジェイドガーデンパレスにおいて開催されました。

1) 講演会 (15:00~16:00)

恒例の講演会は、昨年と同じ「あらた同窓OB・OGの活躍」というテーマで、鹿児島大学大学院農学研究科・学術特定研究員・島田温史氏（大学院生物生産学専攻H26修了）による「パッションフルーツ (*Passiflora edulis*) における高品質果実安定生産のための最適環境条件解明に関する研究」について講演をいただきました（講演要旨は本誌8ページ参照）。

2) 総会 (16:00~17:00)

藤田晋輔会長および岩井久農学部長の挨拶に続き、議長として林満氏（蚕糸S35）が選出され、林議長のもとで下記の議案について事務局の趣旨説明を行い、審議の結果、いずれの議案も意義なく承認されました。（1）平成29年度の事業報告（案）、一般会計収支決算（案）、名簿特別会計収支決算（案）、功労者表彰特別会計収支決算（案）並びに監査報告

（2）平成30年度の事業計画（案）、一般会計収支予算（案）、名簿特別会計収支予算（案）並びに功労者表彰特別会計収支予算（案）

2. 評議員会

平成30年度評議員会は、11月12日（月）、17:30からあらた記念会館で開催しました。

藤田晋輔会長並びに岩井久学部長の挨拶の後、会長が議長を務め、総会に付議する事項等について審議・報告を行いました。審議事項は以下の通りでした。

（1）平成29年度の事業報告（案）、一般会計収支決算（案）、名簿特別会計収支決算（案）、功労者表彰特別会計収支決算（案）並びに会計監査報告（2）平成30年度の事業計画（案）、一般会計収支予算（案）、名簿特別会計収支予算（案）並びに功労者表彰特別会計収支予算（案）（3）役員交代（案）報告（4）その他

審議では、最初に平成29年度の事業報告（案）、一般会計収支決算（案）、名簿特別会計収支決算（案）、功労者表彰特別会計収支決算（案）について事務局の説明があり、続いて監事から会計監査報告の後、一括して質疑応答が行われました。その主要な論点は以下の通りです。（1）「あらた同窓会報平成30年春季号」の頒布先については同窓会会計

の点から幹事会で検討した結果、前年同様「直近の5年間に会費納付の実績を有する者」、「80歳以上の会員」、「終身会員」、「賛助会員」及び「学生会員」と、可能な限り多くの会員に農学部と同窓会の近況、地域支部会やクラス会の情報など情報をお届けするという趣旨で、卒業後5（H.25卒）、10、15、20、25、30、35、40、45、50、55（S.38卒）年を経過した5年毎の連絡先が判明している会員（約1,300名）合計で約3,600名に会報を頒布したことが説明されました。（2）「一般会計収支決算（案）」と「名簿特別会計収支決算（案）」については、前年同様、あらた同窓会報並びに会報送付経費および卒業生名簿の印刷についてはそれぞれ最低価格の会社に委託したこと等により支出額が大幅に減少できたこと、会報賛助金を募集した結果、183名の「終身会員」、「旧賛助会員」からとFS31同窓会からの賛助金、役員からの寄附金により合計で約103万円の浄財があったことにより、収入が大幅に増加し、その結果、平成29年度の収支決算は約220万円の繰り越しが報告されました。いずれも承認されました。

次に、平成30年度の事業計画（案）、一般会計収支予算（案）、名簿特別会計収支予算（案）並びに功労者表彰特別会計収支予算（案）について事務局の説明があり、質疑応答が交わされました。その主要な論点は以下の通りです。（1）「あらた同窓会報平成31年春季号」については、平成30年7月に5年ぶりに「会員名簿」を発刊し、約11,000名の住所判明生存者が把握できたこと、同窓会会計に余裕ができたことなどの理由から、住所判明者全員に頒布すること、（2）「会報および卒業生名簿」の印刷については前年同様相見積もりを取り最低価格の会社に委託すること、（3）役員手当のうち前年度廃止した常任幹事の手当については、会計監査委員から「謝礼相当の手当を支給するのが望ましい」との指摘があったことから、幹事会で対応を協議すること、（4）『鹿大「進取の精神」支援基金』への寄付金の不足分については、基金特別会計から一時借用し、一般会計から基金に年次計画で返却して行くことし、平成30年度は一般会計から、50万円を返却すること、（5）2019（平成31）年は1909（明治42）年から110年を迎えることになることから、「鹿児島大学農学部開学110周年」にあたって、農学部と連携・協力して「開学110周年記念事業」に取り組むこと、毎年3月に発行している「あらた同窓会報春季号」に「農学部創立110周年記念特集」を加えて増ページとして発行することとし、その原稿募集を平成30年春季号で行なうこと、110周年記念式典については、2019年11月23日に農学部と協力して「ミニ式典」を行うこと、以上（1）から（5）について提案して、審議の

結果承認されました。また、開学110周年記念事業に関しては農学部長に相談し、農学部副学部長の一人と同窓会が打ち合わせながら企画・運営することとすることも承認されました。

役員の選任について事務局の説明がなされ、原案どおり承認されました。

3. 常任幹事会及び幹事会

常任幹事会及び幹事会は合わせて4回（うち1回はメール会議）開催され、会報の編集及び発行、評議員会に付議する議案書の作成、講演会の企画・実施、同窓会運営の健全化方策ならびにホームページの管理等について協議が行われました。

平成30年度も随時開催して、本会の事業の企画・実施等について協議を行います。

4. 会計監査

平成29年度の会計監査は平成30年10月18日（木）に3名の監事によって実施され、本会の事業および会計事務が適切に執行されている旨の監査報告書が会長宛に提出されました。加えて、平成29年度から支給を廃止することにした「幹事手当」について、「謝礼相当の手当を支給するのが望ましい」との指摘があった。

平成30（2019）年度の会計監査は2019年10月に実施する予定です。

5. 会報の発行

あらた同窓会報は、平成30年3月23日に春季号、平成30年11月23日に秋季号を発行しました。

平成30年度春季号は、同窓会経理状況の悪化により、平成29年度評議員会および総会の承認を受けて、「直近の5年間に会費納付の実績を有する者」、「80歳以上の会員」、「終身会員」、「賛助会員」及び「学生会員」と、可能な限り多くの会員に農学部と同窓会の近況、地域支部会やクラス会の情報など情報をお届けするという趣旨で、卒業後5（H.25卒）、10、15、20、25、30、35、40、45、50、55（S.38卒）年を経過した5年毎の連絡先が判明している会員（約1,300名）の合計で3,600名に頒布しました。

学生会員を対象に発行している秋季号は、学生会員全員と農学部および共同獣医学部教員の他、地域支部総会時に出席者である一般会員に頒布しました。

「あらた同窓会報平成31年春季号」については、平成30年7月に5年ぶりに「会員名簿」を発刊し、約11,000名の住所判明生存者が把握できたこと、同窓会会計に余裕ができたことなどの理由から、住所判明

者全員に頒布することになります。

6. 講演会

本会と学部共催の学生向け講演会は、平成30年7月26日（木）、16：30～18:00農・獣医共通棟101号教室において、前年同様のテーマ『「海外で経験し、学ぼう」－高等農林学校建学の精神から－』で実施した。講師には、鹿児島大学グローバルセンターの畝田谷桂子教授、生物生産学科4年の有馬航輝君および生物環境学科4年の日吉恵理さんを迎え、それぞれの経験から「海外留学に向けての準備や心構え等」についてお話を伺いました。教職員、学生合わせて50余名の学生が参加しました。講演要旨は平成30年11月23日発行の「あらた同窓会平成30年秋季号（学生向け会報）」に掲載しました。

11月23日の平成30年度本部総会時に行われた恒例の講演会は、「あらた同窓OB・OGの活躍」というテーマで、鹿児島大学大学院農学研究科・学術特定研究員・島田温史氏（大学院生物生産学専攻H26修了）による「パッションフルーツ（*Passiflora edulis*）における高品質果実安定生産のための最適環境条件解明に関する研究）について講演をいただきました。約60名の聴講者がありました（講演要旨は本誌8頁参照）。

7. 地域支部との交流

本会は、地域支部から役員派遣の要請を受けた場合、本部役員あるいは学部教員を派遣し、支部会員との交流を図ります。平成29～30年度現在までの派遣先は、近畿・兵庫あらた会、佐賀あらた会、熊本あらた会、鹿児島あらた会および鹿児島市役所支部あらた会でした。

8. 鹿児島大学同窓会連合会の事業

1）鹿児島大学同窓会連合会の構成同窓会として、4月の入学式に合わせて開催される「鹿児島大学同窓会連合会・総会および懇親会」には積極的に参加し、鹿児島大学との連携の維持発展に貢献しました。年3回開催予定の役員会（会長と常任副会長が出席）および幹事会（常任副会長が出席）にも、積極的に出席し、他学部同窓会との情報交換を活発に行うとともに、大学が行っている各種取り組みには可能な限りの協力を行いました。

同窓会連合会が年2回発行している「鹿児島大学同窓会連合会報」には「あらた同窓会活動」について寄稿するとともに、発行された会報については、本部総会及び地域支部総会の出席者に頒布し、鹿児島大学および各学部同窓会活動の広報に寄与しまし

た。今後、頒布を希望される方はその旨、「連合会本部事務局（Tel:099-275-6881,Fax:099-265-9784、e-mail:kakuryo@kufm.kagosima-u.ac.jp）」あるいは「あらた同窓会本部事務局（Tel/Fax:099-285-8537、E-mail:arataakai@mc2.seikyou.ne.jp）」までご連絡ください。

2）『鹿大「進取の精神」支援基金』への取り組みについて：「鹿児島大学同窓会連合会」を通じて各学部同窓会に対して求められてきた『鹿大「進取の精神」支援基金』への取り組みについては、幹事会で協議し、評議員会および総会に提案し、承認を得られたことから「あらた同窓会」としても他学部同窓会と同様に、総額300万円を平成30年2月23日（平成29年度）に1回で寄付いたしました。300万円の内訳については、平成29年度一般会計から150万円を支出し、残りの150万円については、基金特別会計から一時借用し、一般会計から基金に年次計画で返却することになりました。

9. その他

先に述べたように、平成28および29年度の種々の取り組みにおいて、同窓会財政の逼迫が少し改善されたことから学内常任幹事への謝礼（手当）についても幹事会で検討することになりました。

一方、会費納入促進策を検討・実施すること、引き続き合理的な健全な財政運営を行っていくことにいたします。

会報賛助金協賛者及び寄付者ご芳名H.30.4.10~H.30.12.27

学科卒年	氏名
旧賛助	青 木 孝 良
旧賛助	赤 井 英 夫
旧賛助	阿久沢 正 夫
旧賛助	阿 部 正 昭
旧賛助	荒 井 啓
旧賛助	有 隅 健 一
旧賛助	岩 堀 修 一
旧賛助	梶 井 功
旧賛助	菅 沼 俊 彦
旧賛助	八 木 史 郎
旧賛助	湯 川 淳 一
AS17	志 気 武
AS20	内 波 秀 一
AS20	斎 藤 正 夫
AS22	大 山 利 美
AS22	大 淵 深
AS22	中 村 秀 徹
AS22	春 松 高
AS23	赤 崎 義 則
AS23	石 堂 隼 人
AS23	是 澤 儀 明
AS23	玉 利 半 三
AS23	野 崎 正 寛
AS25	宮 崎 政 和
AS26	上ノ 蘭 誠
AS26	岡 留 善次郎
AS26	八 幡 正 則
AS28	寺 尾 正 徳
AS29	越 猪 忠 祐
AS29	逆瀬川 國 男
AS29	迫 本 大
AS30	福 田 力
AS31	村 井 敏 夫
AS32	加 来 節 夫
AS32	藤 瀬 正 八
AS32	古 市 吉 男
AS32	松 澤 宜 生
AS34	神 吉 善 茂
AS34	竹 下 勝
AS35	中 西 喜 彦
AS36	原 田 淳
AS36	松 本 浩 二
AS37	山 本 明 人
AS39	今 屋 洋
AS39	堀 切 俊 幸
AS40	橋 元 紘 爾
AS41	永 富 成 紀

学科卒年	氏名
AS42	富 岡 忠 勝
AS44	石 原 宏
AS47	池 端 裕 昭
AS49	山 村 耕一郎
AS52	北 野 常 盤
AS53	三 木 洋 二
AS55	鳥 居 裕 一
AS55	三 井 寿 一
AS59	古 蘭 勉
A別24	田 中 重 守
FS18	宮 原 房 夫
FS20	溝 俣 幸 雄
FS22	山 内 孝 平
FS23	山 口 莊 治
FS24	紀 野 武 夫
FS24	小 幡 辰 雄
FS25	田 中 稔
FS26	小 牧 昌 文
FS26	安 武 次郎太
FS28	内 丸 正
FS29	内 邦 博
FS31	伊 藤 正 則
FS31	岩 崎 健 生
FS31	岩 本 六 夫
FS31	瀬戸口 俊
FS31	友 成 明 夫
FS31	野 口 英 昭
FS31	濱 田 直 章
FS31	原 田 俊 一
FS31	松 枝 洋一郎
FS32	上 野 達 木
FS32	後 迫 巖
FS33	渡 辺 惟 萃
FS34	川 邊 恭 右
FS34	金 子 義 幸
FS35	落 合 寅 夫
FS35	中 山 安 宅
FS35	二 宮 隆太郎
FS36	有 蘭 哲 也
FS36	後 藤 幸 夫
FS39	岡 崎 旦
FS39	上拾石 紀 行
FS39	西 田 孝 義
FS39	早稲田 正
FS44	馬 田 英 隆
FS44	下 川 悦 郎
FS57	増 永 英 樹

学科卒年	氏名
FH3	小 原 誠
FH4	堀 智 弘
SS19	北 村 勝 彦
SS22	増 田 信 己
SS23	南 崎 勇
SS24	田 原 富貴男
SS25	増 田 康 哉
SS26	安 藤 孝 輔
SS29	橋 口 勉
SS30	永 田 鉄 山
SS35	藤 井 行 雄
SS40	川 原 俊 秀
SS41	野 口 祐一郎
CS22	井 尻 敏 文
CS23	津 野 林 士
CS25	古 川 良 英
CS26	松久保 好太朗
CS29	宇田川 義 夫
CS29	迫 田 太
CS29	富 田 裕一郎
CS29	森 園 岩 夫
CS30	福 永 隆 生
CS31	小 野 敬一郎
CS31	慶 田 喜 徳
CS32	堀之内 正
CS34	上 山 誠 郎
CS34	小 川 泰 雄
CS34	西 迫 順 弘
CS34	長谷場 彰
CS34	藤 本 滋 生
CS35	木 谷 素 直
CS35	徳 田 彰
CS37	児 玉 正 達
CS37	堀 田 宗 浩
CS38	高 尾 忠 行
CS41	宮 島 年 男
CS42	井 川 隼 次
CS45	中 村 俊 一
CS47	瓜 生 直 樹
CS49	森 田 耕 造
CS50	西 澤 保 孝
CS52	酒 井 知 子
CS54	古 澤 久美子
CS56	吉 川 眞 弓
CS59	宇都宮 裕 子
CS60	神 野 容 子
VS19	清 永 一 雄

学科卒年	氏名
VS19	宮 島 良 男
VS19	山 口 正 巳
VS22	井 出 義 男
VS22	横 田 修
VS25	伊 藤 球 子
VS26	武 村 氏 彰
VS26	渡 邊 幸 博
VS29	堤 兼 利
VS30	三 浦 哲 夫
VS31	蔵 原 久 輝
VS32	奥 田 高 夫
VS32	山 名 孝 善
VS33	藤 田 満
VS34	白 石 義 明
VS34	平 野 敏 之
VS36	松 元 計 士
VS37	石 田 文 洋
VS37	尾 下 泰 彦
VS39	萬 野 秀 幸
VS55	本 山 健 次
VS60	佐々木 悟
VH26	藤 田 祐 一
GS31	坂 上 千 之
GS33	鎌 田 澄 利
GS35	窪 田 孟 弘
GS38	高 倉 喜八郎
GS39	安 藤 将
GS39	植 谷 治 夫
ZS42	前 田 芳 實
ZS45	村 尾 実
ZS46	所 崎 旦
ZS47	的 野 英 夫
ZS62	城 元 清 巳
ES43	松 田 國 男
ES45	秋 永 孝 義
ES53	中 原 拓 郎
HS48	富 永 茂 人
HS48	野 村 隆 明
HS49	本 村 隆 明
HS51	原 耕
HS52	岩 田 賢 士
HS56	空 閑 宏 典
HS56	児 島 三 彦
HS59	古 蘭 啓 子
HS60	長 崎 奈 美
AMH7	志和地 弘 信
F31 同窓会	

あらた同窓会役員名簿

名 誉 会 長	赤崎 義則（農23）	
顧 問	岩井 久（農55）	
会 長	藤田 晋輔（林37）	
副 会 長	浮津 護（林38）	池端 裕昭（農47）
	上林房 行信（農工51）	富永 茂人（常任・園48）
監 事	下川 悦郎（林44）	黒木 譲二（農47）
	菊川 明（農48）	
常 任 幹 事		
庶務担当	田浦 悟（農59）	南 雄二（化59）
会計担当	末吉 武志（農工平5）	
会報担当	樗木 直也（化58）	遠城 道雄（院農59）
	寺本 行芳（環平7）	
名簿担当	津田 勝男（農55）	
広報担当	平 瑞樹（農工62）	
幹 事	坂井 教郎（賛助）	清水 圭一（賛助）
	奥山 洋一郎（賛助）	大塚 彰（畜平1）
	高山 耕二（院生平8）	鶴丸 博人（資平13）
	一二三 達郎（獣平22）	
評 議 員	内 國弘（農33）	脇 秀一郎（農41）
	東 孝行（農46）	西田 和夫（農57）
	溝添 俊樹（林41）	大坪 弘幸（林45）
	永田 鉄山（蚕30）	林 満（蚕35）
	大岩 勝徳（蚕36）	稲永 醇二（化42）
	吉満 浩一郎（化59）	堀之内 達男（獣33）
	新納 時英（獣44）	高橋 亘（獣46）
	佐々木 幸良（獣58）	中村 博大（畜43）
	東久保 研一（園48）	大久保 祐司（生平6）
	石橋 松二郎（資平6）	
（役職指定）	各地域支部長 農学部副学部長および学科長 鹿兒島支部幹事	

平成29年度一般会計決算書

収入額 9,217,426円 支出額 7,013,441円
繰越金 2,203,985円

収入の部

項目	予算額	決算額	差異	
会費	4,930,000	4,207,000	723,000	
年会費	2,500,000	2,004,000	496,000	延べ1,002名
入会金				新正会員6名（18,000） 在校生18名（180,000） 新入生179名（1,790,000）
	2,080,000	1,988,000	92,000	
懇親会費	350,000	215,000	135,000	総会会費（43人分）
会報賛助金				拠出者183名 FS31同窓会
	100,000	1,035,000	△935,000	
雑収入				寄附金（365,000） 利子（8）
	360,000	365,008	△5,008	
繰越金	2,108,112	2,108,112	0	
繰入金	2,000	2,306	△306	基金利子
借入金	1,500,000	1,500,000	0	基金からの進取の精神寄付金への借り入れ
合計	9,000,112	9,217,426	△217,314	

支出の部

項目	予算額	決算額	差異	
会議費	458,000	352,340	105,660	
総会費	378,000	259,200	118,800	総会会費（5,400円×48名）
役員会費	80,000	93,140	△13,140	幹事会、会計監査、評議員会
事業費	2,070,000	1,493,270	576,730	
印刷費				学生向け会報（99,360） 春季号会報（210,039）
	800,000	309,399	490,601	
卒業祝賀会費	300,000	300,000	0	
支部交付金				広島（4,000） 近畿（2,800） 兵庫（2,400） 佐賀（10,000） 鹿児島（167,200）
	200,000	186,400	13,600	
旅費				熊本（30,480） 長崎（42,120） 佐賀（36,960）
	200,000	109,560	90,440	
通信運搬費				会報送料（434,100） 振込手数料等（103,811）
	500,000	537,911	△37,911	
講演会費	20,000	0	20,000	
功労者表彰立金	50,000	50,000	0	平成31年度実施予定
事務局費	1,760,000	1,431,944	328,056	
役員報酬	360,000	360,000	0	常任副会長（360,000）
賃金	800,000	572,700	227,300	給料
備品費	150,000	156,600	△6,600	パソコン
消耗品費	30,000	25,803	4,197	事務用品等
光熱水費				電気（74,265） 上下水道（7,806）
	100,000	82,071	17,929	
通信運搬費				インターネット接続料（20,736） 電話（71,992） サーバー使用料（14,126） 切手・ハガキ（30,331） 送料等（6,173）
	200,000	143,358	56,642	
賃借料	60,000	56,052	3,948	会館建物使用料
慶弔費	60,000	35,360	24,640	弔電等
会館修繕費	0	0	0	
同窓会連合会分担金	100,000	100,000	0	
雑費				同窓会連合会負担金 （2,500円×17名） 寸志等（43,387）
	100,000	85,887	14,113	
繰出金	3,550,000	3,550,000	0	
名簿特別会計へ	550,000	550,000	0	名簿特別会計へ
進取の精神寄付金	3,000,000	3,000,000	0	進取の精神寄付金
予備費	962,112	0	962,112	
合計	9,000,112	7,013,441	1,986,671	

平成29年度同窓会名簿特別会計決算書

収入額 2,076,526円 支出額 818,356円
繰越金 1,258,170円

収入の部

項目	予算額	決算額	差異	
名簿代	0	3,500	△3,500	
雑収入	50	8	42	利子
繰越金	1,523,018	1,523,018	0	
繰入金	550,000	550,000	0	一般会計より
合計	2,073,068	2,076,526	△3,458	

支出の部

項目	予算額	決算額	差異	
名簿作成費	810,000	772,760	37,240	
名簿購入費	750,000	749,000	1,000	卒業生配布用CD版1,500枚
印刷費	60,000	23,760	36,240	卒業生名簿500部
通信運搬費	1,000	2,396	△1,396	
個人情報 業務委託費	0	0	0	
予備費	1,262,068	43,200	1,218,868	同窓会会員名簿写真データ
合計	2,073,068	818,356	1,254,712	

平成29年度功労者表彰特別会計決算書

収入額 327,418円 支出額 0円
繰越金 327,418円

収入の部

項目	予算額	決算額	差異	
繰越金	277,416	277,416	0	
繰入金	50,000	50,000	0	平成29年度積立金
雑収入	20	2	18	利子
合計	327,436	327,418	18	

支出の部

項目	予算額	決算額	差異	
祝賀会費	0	0	0	
記念品費	0	0	0	
雑費	0	0	0	
予備費	327,436	0	327,436	
合計	327,436	0	327,436	

あらた同窓会資産表

平成30年9月末日現在

基金特別会計

定期預金	鹿児島銀行	10,000,000円
定期預金	南日本銀行	1,500,000円
普通預金	鹿児島銀行	601,543円
合計		12,101,543円

一般会計

普通貯金	郵便局	2,203,985円
------	-----	------------

名簿特別会計

普通貯金	郵便局	1,258,170円
------	-----	------------

功労者表彰特別会計

普通貯金	南日本銀行	327,418円
------	-------	----------

統計	15,891,116円
----	-------------

監査報告書

あらた同窓会平成29年度事業実績並びに会計について監査しましたが、諸帳簿、証拠書類、預金通帳等はよく整理され、事業運営並びに会計事務は適切に処理されているものと認めます。

平成30年10月18日

あらた同窓会

監事 菊川 明 監事 黒木 譲二 監事 下川 悦郎 

あらた同窓会

会長 藤田 晋輔 殿

平成30年度一般会計収支予算書

収入額 7,495,985円 支出額 7,495,985円

収入の部

項目	本年度 予算額	前年度 決算額	差異	
会費	4,830,000	4,207,000	623,000	
年会費	2,400,000	2,004,000	396,000	延べ1,200名
入会金	2,080,000	1,988,000	92,000	新入生10,000円×(205名) 新正会員3,000円×(10名)
懇親会費	350,000	215,000	135,000	5,000円×(70名)
会報賛助金	100,000	1,035,000	△935,000	
雑収入	360,000	365,008	△5,008	寄附金、利子等
繰越金	2,203,985	2,108,112	95,873	
繰入金	2,000	2,306	△306	基金利子
借入金	0	1,500,000	△1,500,000	
合計	7,495,985	9,217,426	△1,721,441	

支出の部

項目	本年度 予算額	前年度 決算額	差異	
会議費	478,000	352,340	125,660	
総会費	378,000	259,200	118,800	総会会費(5,400円×70名)
役員会費	100,000	93,140	6,860	幹事会、会計監査、評議員会
事業費	2,820,000	1,493,270	1,326,730	
印刷費	750,000	309,399	440,601	会報(秋季号、春季号)
卒業祝賀会費	300,000	300,000	0	
支部交付金	200,000	186,400	13,600	各支部へ
旅費	200,000	109,560	90,440	支部総会出席等
通信運搬費	1,300,000	537,911	762,089	会報送料、振込手数料等
講演会費	20,000	0	20,000	講師謝礼等
功労者表彰積立金	50,000	50,000	0	平成31年度実施予定
事務局費	1,770,000	1,431,944	338,056	
役員報酬	360,000	360,000	0	常任副会長
賃金	800,000	572,700	227,300	給料等
備品費	160,000	156,600	3,400	
消耗品費	30,000	25,803	4,197	事務用品等
光熱水費	100,000	82,071	17,929	電気、上下水道等
通信運搬費	200,000	143,358	56,642	インターネット接続料、 切手・ハガキ等
賃借料	60,000	56,052	3,948	会館建物使用料
慶弔費	60,000	35,360	24,640	祝電、弔電等
会館修繕費	0	0	0	
同窓会連合会分担金	100,000	100,000	0	
雑費	100,000	85,887	14,113	
繰出金	1,050,000	3,550,000	△2,500,000	
名簿特別会計へ 進取の精神寄付金	550,000	550,000	0	名簿特別会計へ ^{注1)}
基金特別会計へ	500,000	0	500,000	基金特別会計へ ^{注2)}
予備費	1,177,985	0	1,177,985	
合計	7,495,985	7,013,441	482,544	

注1) 進取の精神寄附金は、平成29年度において300万円を寄附した。
注2) 基金特別会計から借用した150万円は、年次計画で返却することとしたので、本年度は50万円を返却することとする。

平成30年度同窓会名簿特別会計収支予算書

収入額 1,808,220円 支出額 1,808,220円

収入の部

項目	本年度 予算額	前年度 決算額	差異	
名簿代	0	3,500	△3,500	
雑収入	50	8	42	利子
繰越金	1,258,170	1,523,018	△264,848	
繰入金	550,000	550,000	0	一般会計より
合計	1,808,220	2,076,526	△268,306	

支出の部

項目	本年度 予算額	前年度 決算額	差異	
名簿作成費	50,000	772,760	△722,760	
名簿購入費	0	749,000	△749,000	
印刷費	50,000	23,760	26,240	卒業生名簿500部
通信運搬費	5,000	2,396	2,604	
個人情報 業務委託費	0	0	0	
予備費	1,753,220	43,200	1,710,020	
合計	1,808,220	818,356	989,864	

平成30年度功労者表彰特別会計収支予算書

収入額 377,438円 支出額 377,438円

収入の部

項目	本年度 予算額	前年度 決算額	差異	
繰越金	327,418	277,416	50,002	
繰入金	50,000	50,000	0	平成30年度積立金
雑収入	20	2	18	利子
合計	377,438	327,418	50,020	

支出の部

項目	本年度 予算額	前年度 決算額	差異	
祝賀会費	0	0	0	
記念品費	0	0	0	
雑費	0	0	0	
予備費	377,438	0	377,438	
合計	377,438	0	377,438	

第1章 総則

(名称)

第1条 本会は、鹿児島大学農学部あらた同窓会（通称：あらた同窓会）と称する。

(目的)

第2条 本会は、会員相互の交流と親睦を図るとともに、農学部の発展に寄与することを目的とする。

(事業)

第3条 本会は、前条の目的を達成するために次に掲げる事業を行う。

- (1) 会報及び会員名簿の発行
- (2) 農学部との連携及び協力
- (3) その他必要と認めた事項

(支部)

第4条 本会は、支部を必要な地に置くことができる。

第2章 会員

(会員)

第5条 本会は、次に掲げる正会員、学生会員及び賛助会員をもって組織する。

正会員

- 鹿児島高等農林学校卒業者
- 鹿児島農林専門学校卒業者
- 鹿児島大学農学部卒業者
- 鹿児島大学大学院農学研究科修了者

学生会員

農学部及び大学院農学研究科に在籍する学生

賛助会員

- 現賛助会員（現職教員）
- 旧賛助会員（退職教員）

2 会員は、住所等に異動が生じた場合、その都度事務局に連絡するものとする。

第3章 役員等

(役員)

第6条 本会に次の役員を置く。

- | | |
|----------------|-----|
| (1) 会長 | 1名 |
| (2) 常任副会長 | 1名 |
| (3) 副会長 | 3名 |
| (4) 評議員 | 若干名 |
| (5) 監事 | 3名 |
| (6) 常任幹事及び幹事 | 若干名 |
| (7) その他会長が認めた者 | |

(役員の選任)

第7条 会長、常任副会長、副会長、評議員及び監事は、総会において選任する。

2 評議員は、前項の他に各地域支部支部長、農学部副学部長及び学科長、並びに鹿児島支部幹事をもってこの任に当てる。

3 幹事は、農学部の各講座から推薦された者をもってこの任に当て、その中から庶務、会計、会報および名簿担当の常任幹事を互選する。

(役員の任務)

第8条 会長は本会を代表して会務を総理する。

2 常任副会長は会務の執行を総括し、事務局を統括する。

3 副会長は会長を補佐し、会長に事故があるときは、その職務を代行する。

4 評議員は、総会及び評議員会の構成員として、会務の執行上重要な事項を審議する。

5 監事は会計の執行状況の監査を行う。

6 常任幹事及び幹事は、幹事会の構成員として、本会の事業の企画・立案及び実施等に関する事項について協議を行う。

(役員の任期)

第9条 総会で選任された役員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、役員に欠員を生じた場合の補欠の任期は前任者の残任期間とする。

(名誉会長及び顧問)

第10条 本会に名誉会長及び顧問を置くことができる。

- 2 名誉会長は会長が委嘱する。
- 3 農学部長は本会の顧問とする。
- 4 名誉会長及び顧問は、会議に出席し、意見を述べることができる。

第4章 会議

(会議)

第11条 本会の会議は、総会、評議員会及び幹事会とする。

(総会)

第12条 総会は、第5条第1項及び第10条に掲げる者をもって組織する。

2 総会は、次に掲げる事項を審議する。

- (1) 役員の選任に関する事項
- (2) 事業計画及び事業報告に関する事項
- (3) 予算及び決算に関する事項
- (4) 会則の改廃に関する事項
- (5) その他会長が必要と認めた事項

3 総会は、会計年度開始から2ヶ月内に会長が招集する。

4 総会の議長は出席者の中から選出する。

5 議事は出席者の過半数で決するが、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(臨時総会)

第13条 臨時総会は、会長が必要と認める場合に開催できる。

2 臨時総会の議長の選出並びに議決は前条の規定によるものとする。

(評議員会)

第14条 評議員会は、会長、常任副会長、副会長及び評議員をもって組織する。

2 評議員会は、次に掲げる事項を審議する。

- (1) 総会に付議すべき事項
- (2) 本会の運営における重要な業務の執行に関する事項

(幹事会)

第15条 幹事会は、常任副会長、常任幹事及び幹事をもって組織する。

2 幹事会は、次に掲げる事項を協議する。

- (1) 総会及び評議員会に付議する議案書の作成
- (2) 本会が行う業務の具体的執行計画等

第5章 会計

(経費)

第16条 本会の経費は、正会員及び現賛助会員の会費、学生会員の入会金及び会費、寄付金等をもって充てる。

2 正会員及び現賛助会員は、年会費として2,000円を納付する。

3 学生会員は、入会金及び在学中の会費として、入学時に、10,000円を納付する。

4 年齢が満80歳に達した会員は会費納付を免除する。

(会計年度)

第17条 本会の会計年度は、10月1日から翌年9月30日までとする。

(監査)

第18条 監事は、会計年度ごとの事業実績並びに会計の執行について監査を行い、その結果を会長に報告する。

第6章 事務局等

第19条 本会の事務を処理するために事務局を置く。

2 事務局は鹿児島大学農学部あらた会館内に置く。

(雑則)

第20条 この会則に定めるもののほか、本会の運営に関し必要な事項は、別に定める。

附則

本会則は、昭和28年12月12日より施行する。

本会則は、昭和53年11月23日より改訂施行する。

本会則は、昭和60年11月23日より改訂施行する。

本会則は、昭和61年11月23日より改訂施行する。

本会則は、昭和62年11月23日より改訂施行する。

本会則は、平成12年11月23日より改訂施行する。

本会則は、平成23年11月23日より改訂施行する。

覚書

1 過去に終身会費を納付した終身会員は年会費の納付を免除する。

2 あらた同窓会功労者表彰は、2009年を起点として、5年毎に行う。



鹿児島大学農学部開学110周年 「110周年記念特集」



鹿児島大学農学部沿革

明治 41 年 3 月	鹿児島高等農林学校設置（農学科、林学科）、学内農場設置
〃 42 年 7 月	林園新設
〃 42 年 12 月	高隈演習林新設、佐多演習林新設
大正 1 年 11 月	種子島牧場新設（昭和 43 年 3 月間場）
〃 5 年 7 月	唐湊果樹園新設
〃 7 年 10 月	指宿植物試験場新設
〃 9 年 2 月	養蚕学科新設（昭和 38 年 4 月蚕糸学科募集停止）
〃 10 年 3 月	農芸化学科新設
昭和 6 年 9 月	桜島溶岩実験場新設
〃 14 年 4 月	獣医学科新設
〃 16 年 8 月	附属家畜病院新設
〃 19 年 4 月	鹿児島農林専門学校に改称
〃 23 年 9 月	農業電気科新設（昭和 26 年 3 月廃止）
〃 24 年 5 月	鹿児島大学農学部設置（「国立学校設置法」昭和 24 年法律第 150 号）
〃 29 年 4 月	総合農学科新設（昭和 38 年 4 月募集停止）
〃 29 年 4 月	唐湊実験林に名称変更
〃 33 年 4 月	垂水貯木場新設
〃 34 年 4 月	学内実験苗畑新設
〃 38 年 4 月	畜産学科・農業工学科新設
〃 41 年 4 月	大学院農学研究科修士課程設置
〃 43 年 4 月	入来牧場新設
〃 44 年 4 月	園芸学科新設
〃 59 年 4 月	獣医学科 6 年制に移行
〃 63 年 4 月	鹿児島大学大学院連合農学研究科（後期 3 年のみの博士課程）設置
平成 2 年 4 月	学科（獣医学科を除く）改組（生物生産学科、生物資源化学科、生物環境学科）
〃 2 年 4 月	山口大学大学院連合獣医学研究科（4 年の博士課程）構成大学
〃 3 年 4 月	垂水育苗実験地に名称変更
〃 6 年 4 月	大学院農学研究科修士課程改組
〃 9 年 4 月	学科再編（生物生産学科、生物資源化学科、生物環境学科）
〃 12 年 4 月	唐湊林園、垂水実験地、実験苗畑に名称変更
〃 13 年 4 月	大学院農学研究科修士課程再編
〃 16 年 4 月	国立大学法人鹿児島大学となる。
〃 17 年 4 月	動物病院に改称
〃 18 年 4 月	獣医学科改組
〃 18 年 4 月	焼酎学講座（寄附講座）設置
〃 20 年 5 月	農学部建物改修事業終了（主要 5 建物）
〃 21 年 11 月	農学部開学 100 周年記念式典を挙行
〃 22 年 3 月	農学部附属演習林開山 100 周年記念式典を挙行
〃 23 年 4 月	附属焼酎・発酵学教育研究センター新設、附属越境性動物疾病制御研究センター（TAD）新設
〃 24 年 4 月	共同獣医学部設置
〃 27 年 4 月	農水連携国際食料資源学特別コース（農学系サブコース）新設
〃 28 年 4 月	学科改組（農業生産科学科、食料生命科学科、農林環境科学科）
〃 29 年 3 月	農学部獣医学科最後の卒業

我が人生行路を振り返る

— 一般教養部、そして農学部に —

藤 田 晋 輔

(林・昭37年卒)



「光陰矢の如し」振り返ると実に速い。新年で八十路が始まった。大学入学以来、夢見た目標に向かった航路を紆余曲折のもと歩んできた61年。しかし、これから、期限がありながら期限が見えない残された人生行路に「わくわくドキドキ」である。

ところで、昭和33年当時の国立大学の入学試験は1期、2期と振り分けられ、鹿児島大学は2期、入学試験は3月中旬に行われていた。大学は春休みに入り農学、林学科の学生達はそれぞれ種子島牧場及び指宿植物園や高隈演習林等に宿泊を伴った実習に出かける時期。受験初日、林学科の3年生であろうか、午前7時半頃から大きな登山リュックを背負った学生達が三々五々、農学部正面玄関に横付けされた「鹿児島大学農学部高隈演習林」と記された大型トラックに荷物を積み込んでいる光景があった。学生さんの動きを見ながら、3年後の演習林実習や将来林野庁に務めた姿を思い描き、試験開始を待った記憶がある。幸いに、農学部林学科定員30名に入れたが、留年せずに全員30名卒業した「F37卒」である。

一般教養部の1年半は高校の延長のような授業であったが、内容は新鮮味を憶え楽しく学べた。外国語により組分けされた農学部1組（農学科、蚕糸学科および農芸化学科）と農学部2組（林学科、獣医学科、総合農学科）。保健体育と称した体育は座学と実技、体育実技の単位認定は①学友会体育会系のクラブ活動、②ハイキング等自己申告による別枠90時間の上乗せ、③夏休み開設の臨海実習（希望者が多く抽選）の3択のいずれかであった。筆者は③を選んだが、抽選に漏れたら②の条項による時間不足で不合格であった。しかし、幸いに参加できたことにより単位取得。林学科は全員関門通過。10月から専門に進学したが、わずか2カ月程度の専門科目を学ぶ中、危ない？と思いながらも大学院進学に進路変更。同級生2人とそれぞれ別大学院（筆者だけが「外国語：英語・独語2科目」）であったが、独語は造林

学の（故）初島住彦教授の指導を仰ぎながら、友人3人と切磋琢磨した。企業志望者は4年次春前に、国家・県上級職は9月初旬に、残されていた我々3人も9月下旬には卒業後の行先は全員決定した。

残された半年を如何に過ごすか？各人異なるが、大部分の学生が11月初旬には卒業論文を完成させ、これまでの学資、生活資金の返却、またはその後の学資、生活のためにアルバイト。親がかりでない自己処理の時代である。筆者は演習林（故）首藤三吾教授の指示のもと、同じ研究室3人と高待遇（8,000円/日/1人）の高隈演習林経営案作成のための約1ヶ月の林班境界測量、次いで砂防工学（故）木村大造教授の紹介による紫原団地造成のプレ測量（約2ヶ月）と進学後の修士課程2年間の学資、生活のための十分な資金が得られた。今でも両先生に感謝している。共に切磋琢磨した3人組は大学院修士課程修了後、大学（助手、国研）、民間（製紙会社の研究所）、大学（助手）に勤務した。しかし、民間で頑張り、頭角を現していた河野君は飛躍なると思いきや若くして、陶山君は定年後に思いもよらない事故で鬼籍に旅立った。残された今は、残念ながら冥福を祈るしかない。寂しい結末であるが、残された人生を彼らの夢も含めて追い続けたいと考える最近である。

最後になりましたが、先に100周年記念行事が開催されましたが、その後、わずか10年間に農学部は大きな機構改革が行われたことから、別案内のように、あらた同窓会では今年秋の総会の『11月23日（土）』に農学部と共催し、創立110周年ミニ祝賀会を企画しました。ぜひ、多くの皆さまの積極的なご参加をお待ちしています。

(農学部 あらた同窓会 会長)



夜明けの桜島

荒田の学び舎に感謝

前 田 芳 實

(畜・昭42年卒)



このたび、本年3月を持ちまして、学長を退任することになりました。2013年4月から2019年3月までの6年間の学長在任中、あらた同窓会の皆様ならびに農学部教職員の皆様に暖かいご支援とご協力を戴きましたことに心よりお礼を申し上げます。

1963年に鹿児島大学へ入学して以来、学生としてまた教員として、56年間に渡り、荒田の学び舎で、農学の学びと教育・研究ならびに大学運営に携わり、特にこの10年間は本学理事ならびに学長として、微力ながら母校の管理運営に力を注がさせていただきました。永きに渡り、このキャンパスで学究生活ならびに大学経営に携わることができましたのも、尊敬する恩師の先生方、同僚教職員の皆様、また、同窓会ならびに同窓生の皆様方の暖かいご指導と激励によるものと、心からの感謝とお礼を申し上げます。

入学当時(1963年)の農学部は、建物の大半が木造・モルタル造りで、鉄筋コンクリートの建造物は農学部1号館(現在の農獣医学部共通棟)のみでした。木造の講堂や階段教室での冬場の講義はとても寒く冷たく、足に毛布を巻きつけたり、綿入れを羽織ったりして講義を受ける学生もいて、まさに、“同袍有友自相親”の観でした。

私は、畜産学科の第1回生として入学しましたので、新設学科の教育設備は十分では無く、当時の先生方が文部省の専門教育課と掛け合って、実験・実習設備や教育環境の整備に奔走しておられた事を思い出します。そのような先生方のご苦勞を目の当たりにして、学ぶ我々も“学科の新しい歴史を作らねば”との気負いを持って学生生活を過ごした思い出があります。

1966年には大学院農学研究科(修士課程)が設置され、高度専門技術者養成の環境が整えられました。1970年代になると高度経済成長の流れの中で、教育研究環境は序々に改善され、全国の農学部の中でもトップクラスの規模を有するようになりました。さ

らに1988年には、念願の大学院連合農学研究科(博士課程)が設置され、現在では名実共に農水系の高度研究者養成機関として国内外に存在感を示しています。連合農学研究科の修了生は2018年の創立30年目で1000名を越し、国内はもとよりアジア、中東、アフリカ諸国の農・水・環境系の学術研究のリーダーとして、また、教育者として目覚ましい活躍が見られます。連大の機能を支えてこられた歴代の関係教職員の皆様方の献身的なご努力と指導実績に対して深く敬意を表します。

平成31年度より農学研究科と水産学研究科との融合による農林水産学研究科がスタートすることになりました。農学研究科長ならびに水産学研究科長をはじめ、両研究科の現職教員の方々の迅速な英断に対して敬意を表すると共に、旧来の専門性の枠を越えた教育研究の展開を期待いたします。

わが国は少子高齢化社会の中で、グローバルな視野と地域貢献マインドを有する人材の養成、Society 5.0への対応など、大きな課題に直面しています。このような中で、国連では、今の国際社会が2030年までに達成すべき持続可能な開発目標 Sustainable Development Goalsとして、“貧困、飢餓、健康・福祉、水の確保と衛生、豊かな海と陸の保全の推進”などを掲げ、未来社会における農水産学の教育研究の重要性が浮かび上がっています。

大学教育もこの観点からの人材養成が求められると共に、課題解決力やリーダーシップ、また、困難を乗り越える力を備えた人材の養成機能が求められています。教育改革や新たな教育プログラムの実施に当たりましては、OBの皆様方の応援は大変大きな力となり、先般の「進取の精神支援基金」へのあらた同窓会からのご支援は、在学生の留学や海外研修の支援に活かされ、大きな教育成果をもたらしました。同窓生の皆様方の母校への温かい支援に対しまして、心よりお礼を申し上げます。

母校鹿児島大学農学部とあらた同窓会のますますの発展を祈りつつ、退任の挨拶とさせていただきます。

(あらた同窓会 前会長、平成18～21年農学部長、
平成21～24年鹿児島大学副学長・理事、
平成24～31年鹿児島大学長)

「恩師、友、だいやめ」

浮 津 護

(林・昭38年卒)



きのうの様に思える開学 100 周年からもう 10 年すぎたとは、どうしても実感できずに、今この原稿を書いております。

顧みますれば、この間にも数々の事がありました。表面的には、おだやかで平和な時だったようにも思えます。だが底辺では、苦勞して築き上げてきた、日本の産業を根底から覆す、第 4 次情報産業革命が、世界中を巻き込んで着々と進行している様にも思えます。

一方、日本の実態は世界で初めて経験する少子高齢化問題を抱え、これをどのように解決していくのか、最大の政治課題として取り組まねばならぬ時です。

しかし、数の多さに代表される民主主義がそれを阻み、現状は、「日本流大型レジャーセンター」作りに熱中し、お祭り騒ぎで皆の目をそらしているように見えてなりません。

私にとってのこの 10 年間は、貴重な開学 100 周年行事に参加できたことを顧みることであり、鹿児島大学が私に与えてくれた、「恩師、友、だいやめ、」と言う事を自覚させてくれた時でもありました。

さて、優秀でも、裕福でも無い私にとって、大学に入れるチャンスは 1 回だけでした。でもその頃はそれでも恵まれていたのです。

厳しい学校や、家から解放され、与次郎浜の目の前に広がる桜島を見ながら、本当に毎日が楽しく、今思っても人生で一番良い時だったと思います。

但しその頃は今の様にアルバイト等も全くなく、金銭的には厳しい日々でした。予想外だったのは、同級生に多くの 1 浪、2 浪、3 浪までいました。子供みたいな新生がウロウロして、目障りだったのか、いろいろと教えてくれました。

教養課程も終わり、3 年で各教授の研究室に入ることになりましたが、成績も良くなく、自信もなくウロウロしていました。入学から、常に親しくしてく

れていた、地元出身の I 君が、一緒に辻本先生の部屋に入ろうと誘ってくれ、何とか落ち着くことが出来ました。今思えばこの部屋にはいたことが、貴重な宝を手にする第一歩だったと思います。

昼間の授業より、午後遅くから始まる辻本先生、林先生を囲んでの、「だいやめ」。薩摩白波のお湯割りを飲みながら聞くいろいろな話が新鮮で楽しく、先生からの質問を真剣に考え、整理し、迷いながら答えていたことも今は懐かしい思い出です。

辻本先生のお話の中で一番忘れられない言葉、「人間にとって生きていく上で、一番悲しい事は何だと思えますか」それぞれ、いろいろな返事をしましたが、最後に先生が「することが無い事が一番悲しい」と、珍しく断定的におっしゃいました。その時私は「そんな馬鹿な、したいことが多すぎて時間が足りなくて困っているのに」と強く思った記憶があります。しかし、その後この言葉があらゆる場面で私を救ってくれていたように思います。

給料が高いという単純な理由で企業に入りました。しかし自分が全く通じない事がすぐに嫌というほどわかりました。それから、いろいろな所にまわされ、多くの事を見、多くの人を知ることが出来ました。又、新しいプラント、問題の多い現場にも派遣され、多くの人々に助けられながら、気が付いたら 43 年、やっと企業を卒業できました。企業再建で一番苦しかった、最終の 15 年。その時にも、常に先生、先輩、林学科の友が助けてくれました。そして迎えた開学 100 周年記念でした。

その後のいろいろな場においても、「することが無いことが一番悲しい」という先生の言葉を思い、それを私のエネルギーとして、今日までやってきました。

最後に、未曾有の焼酎ブームですが、なぜか私の前では誰も焼酎の話をしません。もちろん「あらた会の会合」だけは全く別です。

(あらた同窓会 副会長)



開学 110 周年—あらた同窓会の沿革

林 満

(蚕・昭35年卒)



本稿は、これまで実施された開学記念事業と当時の社会情勢や同窓会の状況等との関連を大まかに踏まえながら同窓会の沿革について考察を試みたものである。

鹿児島高等農林学校(鹿児島大学農学部的前身)は、1908年(明治41年)の勅令によって設置が決まり、翌年1909年7月に学則が制定され、同年9月に第1回入学宣誓式が挙行されて開校した。

一方、同窓会の結成は開校から11年目の1920年である。その結成の動機付けとなったのは、第一に、1919年の開校10周年記念事業における卒業生の協賛運動、つぎに、同年施行された大学令に基づく「本校の単科大学への昇格」運動の勃発であり、校外にあってこれらの運動を支援できる同窓会組織の設立の必要性を唱える卒業生の熱い声であった。

同窓会結成後間もなく会員名簿が発行され、さらに、1923年には同窓会会報「あらた」が創刊されるなど設立趣旨に沿った事業や活動が順調に遂行されてきた。

しかし、1941年の太平洋戦争の勃発によって会報「あらた」の発行は中断され、代わりに戦時色の強い「時報」が発行され、終いには授業が停止されて通年動員体制が敷かれた。このように厳しい情勢下の1944年(昭和19年)に高等農林学校は農林専門学校と改称された。しかし、同窓会は名称変更のみに留められた。

1949年(昭和24年)、県内の官立専門学校を統合した新制・国立鹿児島大学が設立された。そして、設立後4年目の昭和28年、農学部第1回生の卒業にあたり、旧制農林専門学校同窓会の数名の幹事と農学部1回生との話し合いの場が持たれ、新制の卒業生が旧制同窓会の組織と伝統を継承する旨の合意が得られ、その合意に基づいて旧制の同窓生と新制の卒業生をもって組織する新たな「あらた同窓会」が発足した。今回、農学部あらた同窓会が110周年を

迎えられるのは、昭和28年の旧制と新制の話し合いの贈り物であり、まさに誇らしい同窓会である。

開校以来、毎年11月23日(新嘗祭)に開校記念式典が挙行され、10周年毎に開校記念式典並びに記念行事が同窓会と共催で実施され、さらに、四半世紀毎の開学25周年、50周年、75周年及び100周年の記念事業では、学校と同窓会で組織する記念事業実行委員会において募金活動をはじめ多種の事業が企画・実施されてきた。当初の開校記念日では記念式典と新嘗祭典が挙行され、10周年毎の記念事業では、上記祭典の外に祝賀会、記念樹の植栽、展覧会、記念誌発行等の事業が行われていた。そして、四半世紀毎の記念事業では、上記事業の外に講演会や記念建造物の建設などそれぞれの事業を特徴づける催しを実施されてきている。

四半世紀毎に実施される開学記念事業は、毎年あるいは10年毎の記念事業に比べて、その規模や内容が大きく異なり、これにはその時代の社会情勢や同窓会並びに同窓生の意識等が強く反映されていると推察される。

1934年(昭和9年)、開校25周年記念事業実施時の同窓会は、結成後9年目、正会員(卒業生)数1901名の小さな組織であった。記念事業に先だって「記念事業会」が組織され、そこで募金活動をはじめ多彩な行事が企画された。その事業は延べ4日間に及び、内容もきわめて多岐にわたっていた。そして、その中には2棟(洋式と和式)の記念会館の建造などが含まれており、その多彩さは後の記念事業に類を見ないものであり、そこに強い同窓意識が示されていた。

木造の記念会館には、屋久杉の用材がふんだんに使われており、農学部に残存する唯一の天然記念物的な価値ある建造物であり、植物園や玉利池と共に現在地に永久保存してほしいという根強い声があることを特記しておきたい。

開学50周年記念事業は1959年(昭和34年)に実施された。このころの社会情勢はやや安定してきていたものの、経済には好況と不況が交互に訪れる景気循環が認められていた。記念事業の企画を始めた時期は、有史以来の好景気「神武景気」であったが、募金活動が始まった1957年以降、数年間は「なべ底不況」と呼ばれる不景気に見舞われていた。そのために資金調達が多難を極め、募金期間を大幅に延長

せざるを得ない状況であった。通常の記念式典等は予定通りに実施されたが、要の「あらた同窓会々館」の建造は大幅に遅れ、3年後にやっと竣工を見ている。その会館の1階には同窓会事務室等が置かれ、2階は同窓生や教職員等の宿泊施設に充られて長く営業が続いていたが、現在は休止されている。

さて、筆者は、開学50周年記念事業直後の昭和35年(1960年)にあらた同窓会の正会員となり、以降約60年間あらた同窓会本部役員として各種の事業・活動に携わってきた。この60年間に行われた75周年及び100周年の記念事業については個人的な見解も交えながら考察を試みてみたい。

開学75周年記念事業は1984年(昭和59年)に実施されている。同窓会では、1982年に記念事業実行委員会が組織され、その翌年には事業の基本方針が決定され、同時に募金活動が実施された。しかし、日本経済は1973年の第1次石油ショックや1980年の第2次石油ショックによる景気不況に陥っていたために、募金額はなかなか伸びず、目標額を大きく下回っていた。そこで、実行委員会は各地域支部を通じて同窓生に再度の協力要請を行っている。幸いにも景気が回復過程へと向かったことから、後半期になって各支部を通じて多額の賛助金が寄せられ、結果的には決算額が目標額を大幅に上回り、事業は余剰金を残して終了している。

上記のように記念事業の成否は、景気の好況・不況に大きく影響されるが、今回の成功は景気情勢以上に同窓会の組織力並びに同窓意識の強さが大きく影響したことを如実に示すものであった。そして今回の事業で顕著だったのは建造物の新築計画が消え、過去に建造された記念館や庭園などの改修や整備が重点的に行われた点であった。

従来、開学記念事業で校内用地に記念会館等の建造を行い、その建造物を学校に寄贈したうえで建物管理等は同窓会で行っていたが、国有財産に関する法律改正によって、国有地にある建造物を外郭団体が使用する場合、使用料の納付が必要となっており、これらも事業企画に影響していると推察される。

つぎに、75周年から100周年に至る25年間、同窓会の組織・運営方式に大きな改革が行われているのでそれに触れておきたい。

75周年記念事業後の1986年から1991年にかけて日本経済は平成好況(バブル)を迎え、地価、株価が異常に高騰し、金利も上昇した。このような好況の下で、国や自治体をはじめ個人でも資産運用が多用される傾向が見られた。

本会においても資産運用益金による運営について検討が行われた。そして、その結果に基づいて、

1988年(昭和63年)、「終身会員制」を採用するという新たな制度改正が行われた。この改正には下記のような背景があった。従来、本会の正会員の年会費は2,000円で、個人納付或いは地域支部を通じて納付する「年会費徴収制」であった。しかし近年、会費納付者数及び収入額に漸減傾向が見られていたことから、この事業資金の不足をカバーし、本会の運営の安定化を図るために、会員に会費一括払いの新制度への登録が勧められ、2千名余が登録して多額の会費が納付され、これらの資産運用がなされていた。

しかし、1991年(平成3年)に日本経済のバブルがはじけて、運用していた基金はその多くを失うという結果を招いてしまった。それ故に、本会では、その後10年間は新規事業をほとんど行わず、会費収入の多くは失われた基金の修復に回されていた。そんな中の1993年、近畿支部の武元忠男氏(林学科、大正14年卒)は、本会の厳しい資産状況に憂慮されて援助の申出をされ、農学部が基金として1億円の寄付をうけた。そして、本会はその運用益金の一部を事業費に充てていることを書き残しておきたい。

開学100周年がやや近づいた平成10年頃になると、本会の活性化を求める声が聞かれるようになり、まず、会員組織の見直しから検討が始められた。そして、平成12年(2000年)には、学生会員を従来の準会員から正会員に格上げし、「学生会員は、入学時に入会金と在学中の会費を一括納付する」、現職教官については「現賛助会員は年会費を納付する」旨の会則の改正が行われた。さらに、翌年の2001年には、同窓会活動の啓発を目的とした学生会員向けの「あらた同窓会報秋季号」の発行と年1回の「学生向け講演会」の開催が承認され、これらは現在も続行されている。

開学100周年記念事業は2009年(平成21年)に、農学部が将来に向かって大きく羽ばたくことを願って、農学部と同窓会の共催で実施された。

事業は、一世紀にわたる母校の歴史を顕彰する記念誌「あらた百年の歩み」の発刊、開校時に築造された「玉利池と庭園」の整備、過去の記念事業で建造された「あらた記念館」の整備など、建学の気概を後世に伝承することを主軸としたものであった。そして、記念事業で恒常的に行われてきた事業のほかにも農場生産物の展示即売、農学部で生産された原料で製造された焼酎の販売など、市民参加の事業であったことが今回の特徴でもあった。

記念事業の実施期が時の経済不況と重なり、募金期間を大幅に延長して、なんとか目標額が達成され、事業は成功裏に終了できている。

募金活動は、2007年に開始し、記念事業趣意書と募金依頼書を全会員に郵送して協賛をお願いした。

さらに 2008 年及び 2009 年の同窓会報春季号を「100 周年記念特集号」として全会員に頒布して更なる協力要請を行ったが、最終の協賛者数は前回の 75 周年時のそれを大きく下回っており、これには時の経済不況が大きく影響したものと推察したものの、会員の賛同者の減少には不況以外に要因があることは間違いない強く感じさせられた。それは同窓会の事業の魅力足らずだろうか？対処法は？と迷い続けた 60 年間であった。

最後に、同窓会の目的は会則にうたわれている通りだと信じている。しかし、それを理解し賛同する者が近年漸減している実態にどう対処すれば良いかと迷うだけで、これだという結論が得ていないまま稿を閉じることを申し訳ないとお詫びする次第である。

(あらた同窓会 前常任副会長)



半世紀近くも昔の入学試験の思い出

加 藤 高 明

(化・昭52年卒)

鹿児島大学に来る者の殆どいない香川で、そうだ、「農学部に行こう、農学なら南九州だろう」と急に思いついて鹿児島に来ることを決めた。それまで鹿児島はもちろん、九州の地すら踏んだことがなかった。

入学試験は、3 月 23 日（金）～ 25 日（日）だった。11 時過ぎの寝台急行「屋久島」で西鹿児島に着き、旅館への地図を頼りに歩き始めた。道の向こうの海の先に山が見える、ひょっとしてこれが桜島と思った。初めてだったので、桜島があることさえ念頭になかった。

宿は三人の相部屋だった。出願書類請求のときに同封していた旅館組合の申込書によるもので、札幌の人、延岡の人、それに香川の私だった。大学を見に行こうと札幌の人と路面電車で騎射場で降り、大学本部まで歩いた。受験会場はバスで西鹿児島駅に

出れば近そうだったので歩いた。八角形の珍しい形の高校で、照国高校とかいった。私の受験した農芸化学は、試験科目が多く、英語・国語・数学（数Ⅲまで）・理科 2 科目、それに社会で、あの時代にマークシートによる試験だった。宿に帰ると、札幌の人が、芋焼酎を買ってきて名物だから飲もうと言い、みんなで少しずつ飲んだ。参考書は何も持ってきていなかったの、勉強することもなく寝てしまった。

三日目は 1 科目で早く終わったので、西鹿児島駅まで歩き、12 時前に発車の急行「高千穂」に乗った。来るときは、鹿児島本線だったので、帰りは日豊本線にしようと思った。車窓からは列車の進行につれて形の変わる桜島が見え、その移り変わりを見てると飽きない眺めだった。宮崎との県境来到と、桜が満開、南九州では今が満開なんだと車窓から満開の桜を楽しんだ。固い直角の座席に座っての長旅だったが、見るものが初めてで楽しい旅だった。

これが初めての鹿児島への旅だった。

(香川あらた会)

鹿児島大学農学部 110 周年に寄せて

坂 口 哲 夫

(林・昭49年卒)



鹿児島大学を卒業して 45 年、60 歳後半を迎え、自分の足取りと後輩への思いを書かせていただきます。

昭和 49 年林学科砂防研究室を卒業すると同時に当時の建設省に入省しました。西鹿児島駅（今の鹿児島中央駅）を寝台特急で東京に向かいました。東京の建設本省で辞令をいただき、中国地方建設局に配属され社会人のスタートをきりました。砂防職（土砂災害防止に関する職種）という職種です。仕事内容は、当然砂防が中心でしたが、多目的ダムの調査計画、研修機関の研修担当、香川県、長崎県、長野県と 3 県の補助砂防行政、日本道路公団における高速道路の防災、都市防災、技術管理業務など様々な仕事にかかわることができました。平成 17 年 4 月国土交通省の本省勤務を最後に退官しました。その後、砂防関係の財団に移り大規模土砂災害に関する危機管理業務や防災訓練などを中心に、平成 24 年財団を退職して、現在土砂災害に関する業務に強い建設コンサルタント会社に勤務し、全国を飛び回っています。

建設省に入った当時、砂防職で 6 人の鹿児島大学の先輩が活躍されていました。私で 7 人目。そのあと 2 人の後輩が入省され、昭和 40 年台後半から昭和 50 年前半は、砂防の鹿児島大学とも言われました？現在、皆さん退職されましたが、特に、故吉松弘行氏（昭和 45 年卒）は、日本の地すべりを担う人物として嘱望されていた一人でした。その後は、鳴かず飛ばず、砂防職で後輩が入ることはありませんでした。しかし、今度は、鹿児島大学の下川悦郎先生（2017 当時、鹿児島大学地域防災教育センター特任教授）や地頭園隆先生（現 鹿児島大学農学部 農林環境科学科 教授）が活躍されるようになりました。下川先生は、砂防の学術集団である砂防学会の会長までされ 2017 年には、「平成 29 年防災功労者内閣総理大臣表彰」を受賞されました。私も含め多くの鹿児島大学卒業生が、土砂災害防止行政（砂防行政）にかかわり、また、砂防学会においては、上述した先生方がご活躍され、今も活躍されています。鹿児島大学の OB として誇りに思います。

しかし、最近、再び死者を伴う土砂災害の発生が多くなってきました。昨年の九州北部豪雨災害、今

年の広島県を中心とした西日本豪雨災害、北海道胆振東部地震と多くの方々が亡くなりになっています。このような災害が多発するたびに 45 年間土砂災害防止に取り組んできましたが、何をしてきたのか考えさせられるようになりました。このような災害に対し一人でも多くの鹿児島大学の学生さんが土砂災害防止を志し、昔の鹿児島大学林学科砂防教室の諸先輩のように国の砂防行政にチャレンジして頂けないかと思います。

しかし、土砂災害防止を目指す大学講座が全国的にどんどん少なくなっているのも事実です。現在、（一社）建設コンサルタンツ協会で、「砂防・急傾斜専門委員会」の委員長として、土砂災害防止にかかる若手育成にも取り組んでいます。委員会の中に「若手技術者交流 WG」を設け、若い技術者の技術的な指導、また、大学生に向けた「リクルート用パンフレット」を作成、大学で土砂災害防止の仕事の紹介などを行っています。地球温暖化の影響なのか、過去に類を見ない豪雨や地震、火山噴火など自然災害が猛威を振るっています。私自身、平成 5 年の雲仙の噴火災害、平成 9 年の鹿児島県出水市の針原川土石流災害、台風が 10 個上陸した平成 16 年の豪雨災害、同じく平成 16 年 10 月の新潟県中越地震災害など多くの土砂災害を経験してきました。また、最近、平成 30 年 9 月の北海道胆振東部地震の天然ダムの現場にも行ってきました。OB としてどこまで頑張れるかわかりませんが、残りの人生、土砂災害防止にかかわり、少しでも若い方々が、日本の宿命と言われる自然災害に対し関心を持ち災害防止に携わっていただけるよう努力していきたいと思います。鹿児島は、わがふるさと。両親も 90 歳台で元気です。鹿児島には、年 3 回から 4 回帰ります。70 歳を過ぎたら鹿児島で桜島の雄姿を見ながら暮らしたいと思っています。鹿児島大学の後輩の皆さんに少しでも自分の経験を伝えられればと思う今日この頃です。

鹿児島大学農学部創設 110 周年おめでとうございます。

（関東あらた会 会長）



鹿児島市吉野町からの桜島遠望
(2018.12. 撮影)

近畿・兵庫あらた会のこの10年

内 田 昭

(獣・昭25年卒)

日 高 康 貴

(獣・昭37年卒)

近畿あらた会と兵庫あらた会は、この10年で平成23年度を除いて毎年5月下旬に13時から尼崎市のホテル「ホップイン・アミング」で合同総会を開催しています。

その経緯については、鹿児島大学農学部開学100周年記念誌「あらた百年の歩み」で兵庫あらた会山本 稔前会長(林・昭22年卒)が詳細に紹介されていますが、両会とも居住地と勤務地の方で組織されているため双方に加入されている会員もあり、一体化の協議を行ったものの、諸事情で現在に至っています。

しかしながら、近年、両会とも総会の出席者が減少し、固定化していることから平成16年度以後、総会を合同で開催していますので、この10年の総会の概要を経時的に振り返ってみました。

平成21年度は、5月30日(土)に本部林 満常任副会長をお迎えし、最高齢の山口友暢氏(化・昭14年卒)や映画「北辰斜めに」の製作者である廣田稔氏(法文・昭45年卒)など29名が出席して開催しました。

特別講演は、兵庫県立コウノトリの郷公園獣医師三橋陽子氏(獣・平9年卒)による「コウノトリの保護活動と野生復帰への取り組み」を拝聴しました。

懇親会では開学100周年記念の焼酎「あらた百」を酌み交わしました。

なお、8月に大和谷三郎氏(化・昭17年卒)が逝去されました。氏は昭和33年から49年まで近畿の常任幹事・副会長の任にありながら故有里栄一会長(獣・昭22年卒)などと一緒に兵庫の会員としても連日の総会に出席されておられました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

22年度は、5月29日(土)に農学部生物生産学科富永茂人教授をお迎えし31名が出席して開催しました。

なお、兵庫の山下高德副会長(農・昭37年卒)と

同級で京都府在住の前田 勲氏も初参加され、その後も28年まで5回出席されていましたが29年1月に他界されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

23年度は、兵庫あらた会が5月28日(土)神戸市のパレス神戸の和室「布引の間」で本部林 満常任副会長をお迎えし15名が出席して総会を開催しました。

特別講演は、兵庫県を退職後に仏門を叩かれたが、心臓病などの相次ぐ大病により修行を断念された二ツ木健三常任幹事(獣・昭41年卒・旧姓川口)の「人生『てげてげ』今の私」を拝聴しました。

近畿あらた会は翌29日(日)大阪駅ビル近くの季節料理「ひら井」で林 満常任副会長をお迎えし山口県宇部市から参加の日野克彦氏(林・昭36年卒)など17名が出席して総会を開催しました。

浮津 護会長(林・昭38年卒)の挨拶に始まり林副会長からは翌年4月に獣医学科が獣医学部への昇格が決定したことなど我々獣医学科卒業生には嬉しい報告もありました。

24年度は、5月27日(日)に農学部生物生産学科岩井 久教授をお迎えして、奈良県在住で初参加の藤野秀和氏(獣・昭48年卒)など24名が出席して開催しました。

特別講演は、玉利 要氏(畜・昭47年卒)による「玉利農園の11年」と関西大学名誉教授の渡邊幸博氏(獣・昭26年卒)による「空の思想と現代」の2題を拝聴しました。玉利氏はコープこうべの店長から転身後、ご夫妻で施設園芸によるトマト・青ネギなど減農薬・有機栽培に取り組んでこられた経緯と今後の課題について、所崎 旦氏(畜・昭46年卒)の作成されたパワーポイントを使って紹介されました。

しかしながら、玉利氏はこの年12月に急逝されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

渡邊氏は農専卒業後、大阪府に勤務されながら関西大学文学部哲学科で学ばれた異才の方で、20年度も講演をいただきましたが、我々門外漢には些か難しい仏教思想の哲学的な解説でありました。

なお、4月に総会の常連であった清水民敬氏(林・昭38年卒)が肺癌のため逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

25年度は、5月26日(日)に前年に引き続き岩井久教授をお迎えして、前年に米寿を迎えられ高齢者

叙勲を受章された兵庫の神澤亀貴顧問(化・昭19年卒)が10年振りに参加されるなど23名が出席して開催しました。

この年から両会とも会長改選があり、近畿の内田・兵庫の日高が新会長としての抱負を込めて挨拶をしました。特別講演は、近畿会員で姫路市在住の石田光氏(化・平5年卒)が「食品容器硝子と揖保乃糸」についてスライドを活用して、ガラス容器の性質や業界の変遷など興味深い報告と現在の素麺製造販売業の品質管理者の立場から美味しく素麺を食べるコツを紹介いただきました。

26年度は、5月25日(日)に本部林 満常任副会長をお迎えして、体調不良で総会への出席を控えられていた重本重典氏(獣・昭38年卒)が6年振りに参加されるなど18名が出席して開催しました。

特別講演は兵庫県競馬組合西脇馬事公苑管理事務所の丸山重吉氏(獣・昭49年卒)が「日本の競馬の話」について ①現在の中央競馬と地方競馬 ②競馬の歴史 ③兵庫県競馬組合の公正競馬と売上向上への取り組みについて、具体的な事例を交えて紹介いただきました。

27年度は、5月31日(日)に鹿児島大学自然科学教育研究支援センター遺伝子実験施設の田浦 悟教授をお迎えして、重本氏が55年振りに前田 勲氏に再会されるなど21名が出席して開催しました。

特別講演は西川正雄氏(化・昭47年卒)の「エクアドルでのボランティア」が予定されていましたが、JICAの事前研修と重なり取りやめになりました。

また、兵庫の山本顧問が高齢者叙勲を受章され、7月に加古川市で会員有志による叙勲祝賀会を開催しました。

28年度は、5月29日(日)に本部富永茂人常任副会長をお迎えして、兵庫の神澤・山本両顧問が3年振りに、西間庭正士氏(獣・昭36年卒)が20年振りに参加されるなど24名が出席して開催しました。会員の高齢化が進む中、出席会員の最高齢(92歳)の神澤亀貴顧問が数年前に作成された額入りの「折り紙の蝶36匹」が展示されましたが、その繊細さに皆が驚いていました。

なお、山口友暢氏は11月に、山口健二氏(農・昭18年卒)は10月に逝去されました。健二氏には両会の幹事・評議員として卒直なご提案をいただき、「兵庫あらた会報」も毎年の総会時に配布しており第29号となりました。謹んで両先輩のご冥福をお祈り申し上げます。

29年度は、5月27日(土)に田浦 悟教授をお迎えし、神戸市在住の迫田 太氏(化・昭29年卒)が55年振りに、鹿児島県肝付町在住の飯田騏一郎氏(獣・

昭39年卒)が15年振りに参加されるなど24名が出席して開催しました。近畿の会長が体調不良により欠席したため、最高齢の竹内正郎氏(獣・昭23年卒)が、「突然の指名で戸惑ったが自分の為になると思って参加しているので懇談を楽しもう」と挨拶されました。懇親会の最後は最年少の瀬戸口恒夫氏(環・平7年卒)の1本締めで閉じました。

30年度は、5月27日(土)に岩井 久農学部長をお迎えし、明石市在住の田中慶秀氏(化・昭39年卒)が45年振りに参加されるなど17名が出席して開催しました。

なお、田中氏は四国88ヶ所遍路を3回体験されており、著書の「癒された遍路」を出席者に配布いただきました。

特別講演は、大阪教育大学大学院秋吉博之教授(化・昭55年卒)の「『自然科学』から『科学教育』研究への軌跡」―近畿・兵庫あらた同窓会に支えられて―を拝聴しました。なお、詳細は本会報の「支部便り」に掲載しています。

終わりにあたり、鹿児島大学同窓会連合会関西支部設立について6年前から法文学部同窓会を中心に検討されてきましたが、実現に至っていません。

事務局を工学部海洋土木工学科同窓会「しらなみ会関西支部」に移し、全学部に呼びかけ30年11月23日に大阪市で35名(あらた会7名)が出席して新たな取り組みが始められました。どこの同窓会においても参加者が高齢化・固定化で減少し、加えて若い方の参加が殆どないことが大きな課題となっています。

あらた同窓会は、同じ釜の飯を食べた気安さがあり、思いがけない出会いもありますので、関西地区在住の卒業生の皆様、お気軽にご参加下さい。

(内田 昭：近畿あらた会 会長、
日高 康貴：兵庫あらた会 会長)



平成22年度合同総会の集合写真

あらた同窓会岡山支部

濱 脇 吉乃夫

(農・昭37年卒)

あらた同窓会 31 春季号への寄稿の機会を与えていただきありがとうございます。私濱脇は昭和 33 年に農学科農業機械専攻への入学がかない、それも農業機械しか眼中になかったので嬉しさ一杯でした。

家業が農業の為、高卒後すぐに就農しましたが、農作業用の道具は荷馬車、犁、鋤、鉋などの小道具ばかりですべて手作業の物ばかりでした。図書館で読んだ米国、欧州の農業は 20～40PS クラスのトラクタ・プラウ・麦収穫用の大型コンバイン etc. 日本とは比較外の素晴らしい機能のものばかりでした。10ヶ月程手作業農業を頑張っておりましたが、これでは日本農業の将来性は皆無だと判断し、国内農業機械を何とかしなければ……との思いから入試に懸け、鹿大に入学が叶いました。

当時農機研究室は、中馬豊教授の許（後年先生は九州大農機学の名誉教授となられ、退官されました）、スタッフ・学生とも血気盛んに研究に励んでおられ、又他大学には無い農業電気工学も併設されておりました。幸運にも国内農機メーカーが耕運機を中心に開発業務に力を入れ、南端の鹿大にも新機種を貸与してくださり、メーカーとは異なった分野からの研究を依頼され、コマツの農民車、三菱の深耕目的の芯土破碎機ブルディーパー、ヤンマーの小型空冷ディーゼルエンジン等、プロニーやロードセルなどを利用して負荷試験の実地研究に励んだものでした。このような状況は大小を問わず、メーカーに伝わり機械貸与のチャンスが増え、又耐久負荷試験も一年度越えた機種が多くなり、4年生の卒業後も継続して実施された為、学年間の交流が他学科よりも強くなったように感じられました。

昭和 35 年に農林省主催の国内全メーカーの耕運機性能試験競技会が、谷山の県農業試験場で開催され、私共農機専攻学生も測定員の補助者として参加し、全メーカーの機械に接する事が出来、大変貴重な体験をさせて貰ったものでした。私は幸いにも就職先がこの大会で耕運性能、成畦性能で、最優秀賞を獲得した岡山市の富士耕運機（株式会社藤井製作所）に決まり、日本農機の発展に少なからず働けた事を嬉しく思っております。然し、この時から特に業務

上の死闘が約 10 年間続く事になりました。

会社では開発部に配属され、慣れない図面作成からの挑戦でした。昭和 39 年当時農林省管轄の農業機械化研究所（大宮市）から国内初めての乗用トラクタ製作の依頼があり、ヤンマー系列の藤井製作所（13PS）と協和農機（株）（高知市 19PS）それとクボタ農機（堺市 15PS）の 3 機種が昭和 40 年に完成しました。我が社では若年の二人（2 年先輩 1 名と私）が機体メインの本体から外れた耕運部の設計を命ぜられ苦勞の末完成しました。

昭和 40 年春、日本一の米どころ新潟県に新型トラクタの性能試験に向かいましたが、先述した如く約 10 年間の農機開発の死闘が続く事になりました。広大な水田は湛水した泥炭土壌で超のつく湿田でトラクタを入田して約 5 m も進まないうちに完全沈下状態となり軟弱土壌（耕盤皆無）の恐ろしさを強く実感する事になったのです。用意していた米軍廃却の中古ラウンドクルーザーのウインチと稲乾燥用の畦畔の立木を利用してやっとこさ引き上げ、それから、性能試験は完全ストップし、大型水田車輪（超湿田用）の開発に集中し、数えきれない試行錯誤を繰り返し、不満足ながらも湿田走行が可能となったのでした。日本水田の米どころ、石川、富山、新潟、東北 6 県すべてこの様な湿田地帯であり、農機作業不可田が私の推定で 80% を占めていたものと思っていました。このような惨状を目の前にして当社幹部や他メーカーと協力して農林省、通産省そして国会議員にも嘆願して、ようやくにして、日本農業農地の“農地構造改善事業”の大運動を展開してもらい、農機開発の苦難を乗り越えた事実を思うと感慨深いものがあります。当時ヤンマー農機の中田専務の補助員として通産省に頻繁に通い、産業課の課長や、審議官に苦笑されて面談してもらった事などをなつかしく思い出しています。

我が鹿大農機研究室は人間関係が素晴らしく良好で、特に先輩後輩の交流が濃密で学業関係にもよく反映され、在学中も心深く勉学に熱中する事が出来ました。退職後も度々交流の場を設け最近では平成 28 年 2 月に当時の 3 学年（2、3、4 年生）が鹿児島市内で同窓会を開き賑やかにすごしました（写真）。

一方、現在の農業機械業界は、他産業の発展と共に多くの技術革新をすすめており、耕種農業の分野

に於いては、GPS の格段の精度向上に伴い、自動走
操化運転（無人化）、作物の生育判別、土地条件の判別、
肥効分析、収穫適期の判定等々作業形態の多岐にわ
たり、機械の自動化が研究され実用化されつつあり
ます。

ここに於いて誠に心痛ましく思うのは吾々が巣
立った鹿大農業機械科が時代の趨勢とは言え、平成

28 年に種々変遷を経て、組織講座改革・名称変更し
卒業生としては万感の涙を禁じ得ませんが、これも
大観を以て受け留め、我が学科を永遠なる誇りとし
てこれからの農業機械を見守っていきたいと考えて
おります。併せて我があらた同窓会の益々の隆盛を
心から祈っております。ありがとうございました。

（あらた同窓会岡山支部 支部長）



鹿大農学部 錦江の絆同窓会 於 ホテルパレスイン鹿児島 平成28年2月22日

鹿大農学部 錦江の絆同窓会

対岳寮の思い出

～「農学ワッショイ」街頭ストームとは何だったんだろう

松 岡 尚 二

（畜・昭57年卒）

みどり輝で隊列を組む男たちが、「ノウガク、ワッ
ショイ！ノウガク、ワッショイ！」と叫びながら夜
の天文館を駆け抜けていった。「ありゃなんだろう
か？」とそれを偶然見た同級生が翌日、私に聞いた。
私はとっさに「さあ？」としらをきった。大学4年
生のときの記憶である。

本当に何だったのか、走っていた当人である自分
にもわからない。そこで、あの幻をここに思い返し
てみよう（記憶違いが多少あると思うが）。

昭和50年代、寮祭の最後を締めくくる後夜祭のと
きに対岳寮生全員で禪姿になって寮から照国神社ま
で往復走る「街頭ストーム」が行われていた。多分
かなり昔から行われていたのだろうが、その歴史に
ついては当時語り継がれていなかったように記憶し

ている。以下にその概要を記述する。

決行日時は、寮祭であるから11月下旬の日曜日で、
夜7時出発9時くらいに帰寮。

構成メンバーは、対岳寮生全員、他の寮に住む農
学部生（女子寮は除く）、対岳寮OBであったが、水
産学部黒潮寮の上級生数名も参加し、総勢30名程度
であった。

出で立ちは写真の通り緑の禪姿である。対岳寮棟
長が先頭、以下、対岳寮の看板、太鼓、寮旗を押し
立て、残りが3列縦隊で太鼓に合わせて「ノウガク、
ワッショイ」と連呼して走るのである。1年生は出
発前に飲まされたか、禪になるのが嫌で自分から飲
んだかで、出発時にはすでに朦朧とした状態で、3
列の真ん中にされることが多かった。2年生以上にな
ると列の左右、旗持ち、太鼓、看板持ちと役割が
あり、最上級生は脱落したり、フラフラして列から
はみ出ないか見守って、最後尾と列の中央あたりを
単独で走った。酔っ払いを真ん中にしてズルズルと

引きずるように走るのは大変なときもあったが、両脇のほうが手を振れるので楽であったように思う。

後夜祭が最高潮の中、唐湊の寮を出発して、JR 保線区下のトンネルを抜けて、トウフクボールの横（神田電停近く）から県道 24 号線に出、西鹿児島駅（現鹿児島中央駅）に向かう。西駅前の広場で円陣を組み鹿児島高等農林学校校歌、対岳寮歌を歌い、エールを送って、噴水に飛びこみ体を冷やしてから？隊列を組みなおして電車道を天文館へ走る。いづろ中央交差点で左に折れて、照国神社に到着する。整列し参拝、その後、また円陣、寮歌、エール、ちょっと休憩してサポート隊の持ってきたおにぎりを食べたりした。

帰りは、照国から天文館のアーケード（天文館通）を南下し、千日町アーケードに入り天文館グラハンの前で、円陣、寮歌、エール、その後、往路と同じ道をノンストップで帰寮。寮ではファイアーストームのフィナーレとして迎えられ、最後の寮歌、エールをして終了。

今、グーグルで検索すると往復約 8km の道のりである。棟長は事前に走る道路を管轄する南、中央などの警察署に出向いて許可を取り、許可証を腹巻に入れて走った。歩道ではなく車道を走り、信号はちゃんと守っていたが、列が長いので赤になっても渡り終えず迷惑をかけていた。信号が赤だと休めるのでホッとしたものである。

走るといっても駆け足くらいの速さであったのだろうが、焼酎飲んで肩組んで叫びながらの 8km 2 時間である。かなりの体力が必要であったことは確かだ。取り立てて練習はしていなかったのも、学生時代は体力があったものだなと、今しみじみ思う。

今でもやっているのだろうか？この規制の厳しい

時代にできるのか甚だ疑問だが、よく事故なく済んだなと考えていたら、もう少しで大変なことになる事件があったことを思い出した。昭和 54 年の街頭ストーム。天文館グラハン前でのストームが終わった後に M 君がグラハンのガラスを突き破って救急車で運ばれた。M 君は小便をしに禪姿のままグラハンのトイレに入ったのだ。用を済ますとみんなの音が聞こえないので置いていかれると思い、あわてて外に出ようとして、自動ドアと間違えて隣のガラスの壁を突き破ってしまったらしい。幸いにも数箇所の切り傷で済んだが、一步間違えれば大変な事態となっていた。ちなみにガラス代をどうしたかは不明である。また、病院には Y 先輩が同行し、ひとり禪姿のまま待合室で待っているのはとても恥ずかしかったと後に語っておられた。

一方、天文館で寮歌を歌っていると、「鹿大農学部か？俺は先輩だ、がんばれ」と励ましてくれたりお金をくれたりする人もいて農学部の伝統と誇りを感じる場面もあった。よき思い出である。

以上、ざっと振り返ってみたが、この「街頭ストーム」、寮生活に多くあった意味の説明できない行事の最たるものであったようにも思う。1 年生のときは禪姿になって何でそんなことしなきゃならないんだと思って嫌で嫌でたまらなかった。しかし、2 年生になると意気を感じて走るようになり、3 年になると役割を自らこなすようになり、最上級生は全員が無事に完走するために周りに気を配り、冷静に見渡して走るようになっていった。今にして思えば、我々の成長を確認する儀式であったのかもしれない。

今なら、友達に「あれ、おれも走ってたんだぜ」と胸を張って言えるはずである。

（大学院農学研究科畜産学専攻 昭 60 年修了）



広島あらた会の 10 年を振り返って

辻 野 聡

(林・平2年卒)

鹿児島大学開学 110 周年おめでとうございます。100 周年がつい先日のような気もしますが、開学 110 周年に寄せて、最近 10 年間の広島あらた会の活動等について振り返ってみたいと思います。

今から 10 年前の平成 21 年、開学 100 周年の年は、いわずと知れた広島の誇り「広島東洋カープ」のあらたな本拠地 MAZUDA スタジアムが完成し、広島市民球場から移転した年でした。一方、当会においては、長きにわたり会を引っ張っていただいていた木原一男さん（農 12）が亡くなられたうえに、本田親聖さん（林 40）も親の介護のために当地を去り、鹿児島へ戻られた年でもありました。

東京スカイツリーが開業し、ロンドンオリンピックが開催された平成 24 年には、それまで 20 数名を数えていた総会参加人数が過去最少の 11 名にまで減少し、会に危機感が漂った年でした。この現実を真摯に受け止め、同窓会新規登載会員はもとより、既知の会員も含めて参加人数の拡大に向け、当会から郵便による参加呼びかけを開始しました。一方、長年総会の開催場所であった地方共済組合利用施設「鯉城会館」が宴会場等の提供を終了（宿泊利用は現在でも可能）したことで、あらたな開催場所の開拓を始めた年でもありました。

前述の努力の甲斐もあり、平成 25 年には川島仁さん（化 37）、消費税率が 8 % となった平成 26 年には津留見岩男さん（農機 52）の初参加があり、久しぶりに新しい面々との楽しい会話ができました。同年からは、現会長・平野朝彦さん（林 38）が総務部長を務められた平成元年開催の「'89 海と島の博覧会・ひろしま」において多大なるご協力をいただいた、また、馬場孝三さん（林 52）も社長と古くからの知り合いであるという縁で、広島の人気店「むすびのむさし」が新たな開催場所となりました。雰囲気もサービスもとてもいいお店と、当会会員の評判もよく、以降毎回当店で総会を開催するに至っています。

北陸新幹線が開業し、マイナンバー制度がスタートした平成 27 年は、木原一男さん亡き後当会を引っ張っていただいていた武田勝雄さん（林 25）が亡く

なられ、その翌年には、大阪府出身山口県在住にも関わらず、転勤での縁で当会へも参加いただいていた日野克彦さん（林 36）も亡くなられ、悲しみが広がった時期でもありました。

このようにここ 10 年を振り返ってみますと、当会を取り巻く環境は、会員の高齢化と参加人数の減少、会の顔というべき諸先輩方の喪失と厳しい 10 年であったように思われます。前述の会員勧誘活動についても、思ったほどの成果が出ていないのが現実です。しかしながら、そういった状況でも、毎年同窓会総会を開催し、十数名ではありますが 1 年ぶりの再会を祝い 2 時間余りの宴を楽しむ、そういったことを続けてこられたことは、当会の自負でもあります。

当会も今年、第 70 回総会開催の節目の年を迎えます。今年も会員最高齢・伊藤珠子さん（獣 25、88 歳）の参加を得ながら、本部ともども記念の年となるよう、これからも楽しく取り組んでいきたいと思ひます。

(広島あらた会 幹事)



第58回広島あらた同窓会 平成21年1月31日 於 鯉城会館「鳳凰の間」



平成30年度第69回広島あらた同窓会 平成30年10月13日 於 むさし土橋店

「開学 110 周年記念特集号に寄せて」

山下 修 司

(農・昭56年卒)



鹿児島大学農学部が本年開学 110 周年を迎えられることに對し、心からお祝い申し上げます。

佐賀あらた同窓会（以下、「本会」という）では、鹿児島高等農林学校以来佐賀県内に勤務する卒業生が出席する同窓会を毎年 1 回開催しています。

2009（平成 21）年に開催された開学 100 周年行事には、本会から代表 1 名を派遣して、創立 100 年を鹿児島大学本学の関係者とともにお祝いしました。本会の代表者は、翌年の総会で記念式典の模様を報告して総会参加者全員で母校の慶事を喜び、一層の発展を祈ったところです。

本会では、毎年の総会に本学同窓会から代表者を 1 名招き、母校発展の模様について説明を受けているので大方の情報は把握しているところです。

私は、1977（昭和 52）年入学の農学科卒業生の同窓会が昨年鹿児島で開催された際に、卒業後約 40 年ぶりに母校を訪問しました。現在のキャンパスを歩いて本会総会で聞いていた母校の今を実感することができました。昔ながらの建物や農場がある一方で、大学本部や獣医学部、焼酎学講座棟、稲盛会館などの新たな建物に時間の経過を感じました。市立病院など周辺を含めて大学の新たな環境を十分に感じることができました。

残念だったのは、セキュリティ強化のためカード登録者でないと扉が開かなくなっていて校舎の中に入ることが出来なかったことでした。

ところで、私が本会に入会した 1981（昭和 56）年は、本会会長が香月熊雄元佐賀県知事で本会総会は 100 人を超える出席者で賑わい、裏方を担当する新人は会費の取りまとめなどに忙殺されて学生時代を懐かしむ余裕はありませんでした。しかし、近年は会員の高齢化などによって出席者が 40 名ほどとなっているため、新卒者を交え年齢を超えた十分なコミュニケーションができる環境となっています。

また、女性会員も数名入会して県庁の幹部候補と

して活躍しているところです。

ベストセラーになった「定年力」という本によると定年を迎えた先輩が恐れるのは、健康でもお金でもなく孤独であるということです。若いうちから職場以外のネットワークづくりを意識すべきだということです。

若い卒業生は縦社会の象徴でもある同窓会を避ける傾向にありますが、地域で活躍する同窓会の先輩が社会に巣立って間もない卒業生とネットワークを作っていくのは、コミュニケーションとしても理にかなっていると思うようになりました。

鹿児島大学農学部では数年前に創設された「鹿児島大学地域連携プロジェクト」を通じて地域への貢献を念頭に九州の食糧供給基地としてのレベルアップに向けて力を尽くしておられます。

さらに、「森から海までを俯瞰でき農林水産物の流通についての知識も持った応用力のある人材」の養成に向けて大学院の改組を検討されていると平成 29 年の同窓会報に記載がありました。

国は一億総活躍社会を実現するとしています。いくつになっても学び直しができ、新しいことにチャレンジできる社会、人生 100 年時代を見据えて社会経済のあり方を構想するとしています。

農業の現場では、栽培（飼養）に農産物加工をはじめとする 6 次産業化を加えて農家の稼ぐ力を高める施策が進められています。スマート農業への展開も急進展しているほか、労力不足に悩む現場に応える外国人の雇用も一層進むことが見込まれます。

佐賀県庁では、施策の展開方向に稼げる農業の確立、経営力のある担い手の育成や農家経営の経営力改善を掲げています。

鹿児島大学農学部には、総合大学の強みを生かしてマーケティングの知識や外国人等労働力の多様化が進む現場で役立つマネジメント力を備えた若い人材を社会に供給するとともに、学び直しを求める社会人のニーズにも応えることを通じて、来る創立 125 周年へ向けて一層の発展を遂げられることを祈念してこの稿を閉じたいと思います。

（佐賀あらた会 会長）



鹿児島つれづれ草

川瀬大三

(農・昭46年卒)

同窓諸兄同様、まじめに受講・自学に励んだ。担任の小倉教授、大畑教授、石畑助教授、城島講師、串間助手の各先生に厳しいご指導を頂いた。長崎県出身の中村三七郎先生の最終講義は教養部から受講した。

“大変”があった。教養部2年前期、ドイツ語、保健体育各2科目、英語1科目の計5必須科目で赤点を頂戴した。ドイツ語は明らかに勉強不足。保健体育は“秀”に向けた前日の深夜勉強で寝過ごし、受験しなかったことに依る。英語は設問の“order”を“順序”でなく“命令”と受け止めたことに依る。ヘマをしたものだ。英語教官は英国籍バーンズ教授、英国には再試制度が無い。英語での制度説明が第一の関門。留年経験の先輩には“留年止む無し”と宣告され、対岳寮の先輩からは追・再試に向けた必死の勉強中、入れ替り立ち替りの激励訪問、学習効率は下がったがやる気をもらった。結果、5科目の追・再試を突破。留年宣告の先輩からは“やればできる。…うむ!”と御言葉を頂いた。

サークルはボート部、弓道部とを秤に掛けたが、「中・南部九州大会5連覇の強豪部だが主要4流派(剛柔、糸東、松濤館、和道)と異なり、首里の尚王家が採用した小林流で体・筋力には必要なく、スピードを重んじる上流階級の上品な流派」との説明を信じ空手道部を選択した。これが甘かった。地獄の2年間が始まった。1年蛆虫、2年虫けら、3年人間、4年神様の序列。入試に伴う体力不足の中、新入部員37人と多すぎたため、篩にかける意図を込めた鍛錬が始まった。練習は4時半から2時間、試合前の2～4年生は4時間。60人近い練習者×10回の、腕立伏せ(掌、正拳、指立、手甲)、腹筋4種、兎跳び、各種突・蹴・連続技、型、組手等。遠征は年11回(1年生5～6回)、3～4年生は安宿、1～2年生は映画館(オールナイト)、たまに部員実家へ食客。冬の試合オフシーズンは“西日本学生空手道選手権大会遠征資金カンパ”と銘打ってダンスパーティーを主催。名曲“夜霧よ今夜も有難う”で興が昂じたころ、楽曲が中断、舞台上から“カラテひと筋”の先輩方の野太い“押忍”の挨拶に對外試合の話が続

く。パー券販売が問題。空手道部とダンスパーティーがそぐわない。売り込んでも女子学生からは「エ～? 空手部のダンパ～?」と確実に断られた。男女比は釣り合わない。練習に加えて部上納バイト、週6日の練習、なんだかんだで自己バイトは夜警等の深夜ものに限られる。経済的、体力的に苦勞の4年間、気が付けば在籍者は6人(1/6)になっていた。反面、得るものは大きかった。ひ弱な体力、忍耐力、土壇場肝は格段に強くなっていた。

生活は、経済性と集団生活経験を目的に3年を唐湊の学生寮で送った。1年次は教養寮、2年次からは対岳寮。学業はもとより社会性涵養、哲学、友情論、飲ん方、寮歌・愛唱歌(昭和維新の歌、蒙古放浪歌、薩摩兵児唄)等経験豊かな先輩に詳しく教わった。寮歌は支部総会やカラオケ合唱に、愛唱歌は結婚式等での祝辞や乾杯、万歳三唱の発声時にも援用している。100年近く前の20歳代の学生や国を憂う青年の崇高な志と表現力に、古稀を迎えてもなお、唯々感服するばかりである。掲載の写真は“農学部対岳寮街頭ストーム”(S43年10月)の様子である。緑の締込み、裸、裸足で、対岳寮の看板、旗を先頭に2列縦隊で学生寮から天文館を往復、西駅(当時)のフェニックスに巣くう雀が「ワッショイ」の掛け声に驚いて一斉に闇に飛び出す。途中照国神社へ参拝し寮歌奉納。お世話になった交番、飲食店・パチンコ店にも寮歌を披露。異様な出で立ちではあったが警察、通行人からは温かく見守ってもらった。

(あらた同窓会 長崎県支部長)



照国神社で謝辞、寮歌奉納の後記念撮影



天文館で、通行人、パチンコ店に寮歌披露

<添付写真説明>

昭和43年10月 鹿児島大学寮祭 農学部対岳寮天文館参り(正式名称・歴史?)

緑の木綿の締込み、裸、裸足で、対岳寮の看板、旗を先頭に2列縦隊で唐湊の寮から天文館を往復、途中照国神社、お世話になった交番、飲食店・パチンコ店等に謝辞と寮歌を奉納。異様な出で立ちではあったが、警察、通行人からは温かく見守ってもらった。対岳寮生以外からの参加希望があるが、対岳寮生に限る伝統が守られていた。

鹿児島大学と同窓会の絆

東 正 隆

(旧姓星子)

(総農・昭38年卒)



創立 110 周年おめでとうございます。

鹿児島高等農林学校は日本最南端の農林学校として設立され、南の島々を含む農業・林業の発展を目標にしていたが、私の叔父星子直隆（農学科大正 15 年卒）は 37 名の一人として志を立て農学科で学んでいる。私としては、目標がなくふらふらした高校 3 年生であったが、父の勧めがあり初めて鹿児島大学を認識し鹿児島高等農林学校の存在を知った。南の県で温かそうだし、少し魅力的な学校だと感じ受験することにした。

合格者召集には母が付いて来てくれて下荒田の荒田八幡神社の近くに下宿を決めた。四畳半の部屋で食事付きで四千五百円で当時は少し高かったような気がしたが、母と一緒にだったので直ぐに決めることができた。

2 年生の後半専門に進学する時、農業工作第二（農業土木関係）教室に希望して勉強することになった。阿部雅夫先生、河原田礼次郎先生の指導を受けた。

4 年生の冬 1 月には鹿児島には珍しく大雪が降った。農学部は校舎の建物で吹き溜まりになり 40 ～ 50 センチにも積もっていたので、「かまくら」を作った。その中で 2 晩程酒を酌み交わし楽しんだ思い出がある。

卒業後、最初に赴任したのは、阿蘇農業高校農業土木科の 1 年の担任であった。最初からの担任でいささか苦勞もあったが、楽しく 3 年間を過ごすことができた。当時の生徒は、現在 70 歳になっているが、毎年同級会を開き案内があるので、家内共々阿蘇まで行って参加し楽しく過ごしている。

あらた同窓会に参加するようになったのは、あらた会出身の丸岡憲一校長が赴任されてからである。鹿児島大学出身は少なく私が一番年下だったので校長から「熊本あらた会」があるたびに「お前が参加してこい」と言われ、何も分からないままに学校代表で参加していた。

7 年後には熊本農業高校に転勤になり農業土木科の生徒の担任をした。

熊本農業高校は熊本市にあるために「熊本あらた会」の連絡調整の係りを先輩先生のもとでやっていた。当時は熊本鶴屋で「熊本寮歌祭」があり私立大学を含め、陸軍士官学校、海軍士官学校など熊本大学の OB が中心になっていた。当時は先輩後輩の絆が強く縦の糸が固く結ばれていた時だった。鶴屋ホールはいっぱいの観衆で家族も一緒に自分の同窓を応援していた。

我があらた会は、林業会館に集合して景気づけの杯を交わし袴や胴着を身につけ、のぼりや旗を持って鶴屋まで歩いて行っていた。私はその袴や胴着の調達・運搬する役であった。5 ～ 6 年続いたが自然と消滅していった。

昭和 60 年ごろ私が農場長になったころから学校代表の幹事を務めるように言われ「熊本あらた会」の役員として会に参加するようになった。

それから副会長・会長となるときは会員数が減少し、会員は名簿上にはあっても会費納入者・総会参加者が減少し、同窓会の維持継続の難しさに直面した。

「熊本あらた会」は当面の資金不足には終身会費制を導入した。会員が理解を示し 60 歳になると、1 万円を納入し終身会員になってくれた。現在これで一息ついている。同窓生の縦のつながり、上司と職員の繋がりが、同級生、同年代の同窓生の横のつながりが希薄になった現代は、会員を同窓会につなげるものは母校愛ではなからうかと考えている。我々が育った鹿児島大学の周りには、桜島があり優しい人がら、鹿児島特有の地域性が持つ温かみがある。

年に一度の支部総会にも同窓会本部から必ず出席していただく先生方には、感謝している。

学生時代に過ごした思い出・記憶はけして忘れてはいない、そしてそこで身に付けた気質は身に付いて生きている、この両面をうまく同窓会に付加できないか、同窓の人間同士の最後の触れ合いの場となりうるか、努力したいものである。

私は、「敬天愛人」の言葉が好きだ。今、採種田を耕作しながら自然の大切さ、自然の大きさがやっとわかったような気がしている。

「農作業したいときは雨が降り、暑い日には作業が進まない、雲っけては土が乾かない、雨が降らないと土が固まり耕せない、農業は常に自然と生きている」ことを感じた傘寿の春である。

(熊本あらた会 会長)

あらた時代の思い出

佐野 岩 男

(農・昭49年卒)



大学に近い鴨池の地で生を受け、鹿児島大学は幼いころから何時でも身近にあった。小学校時代は、田んぼでのトンボ取りや桑園の桑の実を頂戴し、先生に見つかり追いかけられたり、昔に比べれば小さくなった玉利池ではイカダを作って遊んだことも懐かしい思い出である。

その後、昭和45年農学部に入学することとなったが、特に農業に関心があったわけではない。当初、電気に興味があり工学部を希望したが現役での受験に失敗し、1年間の浪人生活を経たのち、何となく農学を専攻したのが本音である。

こうして入学したものの、入学当時は、大学紛争のあおりを受け、正規の授業が少ないこともあって、多くの同窓生とよく遊び回ったものである。

2年生の後半に専門講座を選択することになり、植物病理学教室に身を置くこととなった。当時は、故榎藤教授を先頭に故植原助教授、有村助手のご指導を受けた。その後、榎藤教授の退官後、新たに荒井助教授が赴任され、昭和49年学部卒後、さらに51年の大学院卒まで4年半お世話になった。

当教室での生活は勉学はもちろんであるが、皆でよく霧島や開聞岳への登山や植原先生宅でのマージャンなどふれあいも多く、自由闊達な雰囲気になりあふれた教室であった。

当時、教室の主な研究テーマは、茶、カンキツをはじめ、地域の重要な特産作物の病害の原因究明が主であった。茶では、てんぐ巣病、かいよう病、赤焼病、カンキツのかいよう病などであったが、いずれも地域の農業現場で大きな課題となっているものばかりであった。先生方の指導のもと、教室での病原菌の分離作業や県内各地へ出かけての試料採取や接種試験など、時を忘れて取り組んだものである。

こうした中、学部初めて電子顕微鏡が導入された。当時電子顕微鏡は、鹿児島ではまだ普及が少ない検査機器であり、これを使った研究ができるのか

と胸が踊ったことを鮮明に覚えている。電子顕微鏡の導入により、植物ウイルス（ファージ）の研究も進んだ。

また、林学科の故徳重陽山先生とのお付き合いもあった。先生が植原先生の先輩であることや「松くい虫」の原因解明に取り組まれていたこともあって、先生の実験のお手伝いをするようになった。その後、先生はその原因が「マツノザイセンチュウ」であることを発見された。発見について、先生は「西日の当たる教室の窓際に置いたシャーレの中で何かキラキラ光った。調べるとそれが線虫であった。これが原因究明につながったが、これは神様がくれたごほうびだと思った。努力を惜しまず取り組むことが大事である」との語られ、大いに感銘を受けたことを覚えている。

さらに、当時から研究に当たっては、県農業試験場の研究員や地域の方々との多くの交流があり、地域と密着した研究が行われ、その後、多くの研究課題は、病原体の分離・同定がされ、病害の軽減に大きく寄与した。

大学卒業後、農業技師として鹿児島県庁に入り、県内各地で勤務し、園芸・特産作物等を担当したが、多くの「あらた同窓の先輩」に公私ともにご指導をいただいた。さらに仕事上もたびたび農学部の先生方には多くの協力を得た。桜島の降灰被害の軽減対策やサトウキビの収穫作業の機械化等さまざまな分野で助言・指導等を受け、県農政の推進に役立った。

こうして、早いもので卒業後40数年になる。大学も本年4月から新たに「農林水産学研究科」がスタートすると聞くと、地域に密着した大学の今後ますますの発展と「あらた同窓の先輩・後輩を通じた絆の拡大」を祈念するものである。

(あらた同窓会 前鹿児島支部長)



開学 110 周年に寄せて～鹿児島市役所支部便り

田 中 隆 義

(農・昭59年卒)



単位：名（ ）は女性

年 度	24	25	26	27	28	29
会員数	115 (12)	120 (12)	112 (13)	110 (13)	109 (15)	106 (14)
新規会員数	1	3	3	2	4	2
総会出席者数	82	77	72	69	74	70

はじめに、鹿児島大学農学部開学 110 周年、誠におめでとうございます。心からお祝い申し上げます。光陰矢の如しとは申しますが、100 周年の記念事業を行ったのが、つい先日のことのように思われ、日々の流れの速さを改めて感じております。

母校が、進取の気風のもと、時代の要請に応えながら有能な人材を輩出し、輝かしい歴史と伝統を築いてこれましたのも、ひとえに歴代校長をはじめ、教職員の皆様のご精励と学生の皆さんの努力の賜物と深甚なる敬意を表する次第です。

さて、私は大学卒業後、鹿児島市役所に入庁し、現在に至っております。以下、所属する鹿児島市役所支部の活動等をご紹介します。

鹿児島市役所支部は、あらた同窓会鹿児島支部に属する職域支部のひとつで、現在の形で活動を始めて 35 年目となります。会員は鹿児島高等農林学校、鹿児島農林専門学校、鹿児島大学農学部在席した者で、かつ鹿児島市職員及び鹿児島市に關係する職員で構成されており、会の運営は、会長・代表世話人・会計の三役を中心に数名の世話人でつくる世話人会が行っております。

鹿児島市役所支部の主な活動は、市役所支部総会の開催と同窓会本部総会や鹿児島支部ボウリング大会及び総会への会員派遣です。市役所支部総会は、年 1 回開催しています。来賓として同窓会本部常任副会長をお招きし、母校や同窓会の最近の状況等をお話しいただいております。議事として前年度の事業報告や収支決算報告、次年度の事業計画（案）や収支予算（案）を審議しています。役員の任期は 2 年で、任期ごとに役員改選を行っています。また、毎年開催される同窓会本部総会や鹿児島支部ボウリング大会及び総会には、母校の発展と会員相互の親睦を図るため、若い会員を中心に可能な限り多くの会員を派遣しております。

上記の表は最近の市役所支部の会員数の状況です。毎年、数名の新規会員を迎え、総数 110 名前後で推移していますが、徐々に減少の傾向にあるようです。女性会員数は 13 名前後で、全体に占める割合は増加の傾向にあります。総会には毎年 75 名程出席しており、会員全員に「買うほどではないが、もらったらうれしい」をコンセプトに記念品を配布しています。会員の記念品に対する期待度は高く、世話人会にとって、その選定が頭痛の種ともなっています。また、総会後の懇親会では抽選会もあり、世代や職種に関係なく、賑やかに楽しいひと時を過ごしています。今後とも、多くの会員が参加しやすい同窓会を目指し、継続して行って欲しいと思います。

結びに、今年は歴史的な皇位継承の年であり、くしくも母校の開学 110 年の節目の年でもあります。鹿児島大学農学部がこれからの新しい時代に即応して、更に大きな使命を達成され、限りなく発展し続けることを祈念いたします。私たち鹿児島市役所支部も微力ながら同窓会本部や鹿児島支部の活動を側面から支えてまいりたいと存じます。

(あらた同窓会 鹿児島市役所支部 前会長)



平成30年度鹿児島市役所支部総会（2019年2月6日）

敗戦直後の学窓生活ア・ラ・カルト

八 幡 正 則

(農・昭26年卒)



◇オンボロ寮と飢えの時代

“桜岳寮”と聞けば、いささかロマンの感じがしますが、旧鴨池海軍航空隊の焼残り兵舎利用の学生寮はひどいものでした。2階が学生向けで、板仕切の部屋に鉄製二段ベッドがあり、天井など張られてなく雨漏りがするのです。

朝食の振鈴が鳴りますと、飯ごうを持って階下の土間に並びます。賄い方のオヤジさんは、長卓上のムロブタ（長方形の浅い箱）に入れたイモ雑炊を、まずシャモジでタテヨコ何人分かに切りわけ、タマジャクシで一区切りつつヒョイとすくい上げて、私たちの差し出す飯ごうのフタの方に入れてくれます。次にオカミさんが、バケツの中の味噌汁（みそしる）ではなく、岩塩の塩っ辛い汁にキャベツなどは茎や根まで入ったものを、竹のヒシャクで一杯つつすくって飯ごうの容器の方に入れてくれます。たったこれだけで、朝と昼の二食分なのです。ひもじくて眠れない夜は水をガブガブ飲んで寝ました。

外出するときは、学生課に届け出ると外食券が渡されます。「外食券指定」の鴨池公園食堂や納屋通りのクマモト食堂をよく利用しました。一食分でコッペパン一個です。みそ汁を別注文して食べるまことに貧しい食事です。それだけに、ときたま手に入れたサツマイモをふかしたり、田舎から送られてきた米を飯ごうで炊いて、腹いっぱい食べたときの満足感は格別でした。

◇ヤミ商売のアルバイト

学生アルバイトにはヤミ商売が盛んでした。ヤミ米やヤミ焼酎の扱いがうまい者、せっけん売りの上手な者などさまざまでしたが、私はもっぱら菜種油をやりました。そのころ農家は、菜種を自家用の油に搾っていました。それを郷里の川辺方面から仕入れます。一升ビンを持ちにくく目立つので、ヤミ摘発を逃れるためにも、ブリキ屋に頼んで平べったい容器を作って油を入れました。それを大型トランク

に詰め込み、本をかぶせて持ち運ぶのです。

売り先は三池や荒尾の炭鉱地帯です。出稼ぎの知り合いを通じて、炭鉱夫下宿屋のオカミさんを紹介してもらい売り歩くのです。夜行列車で運んで行きさえすればすぐに売れました。月に2～3回行けば、いくらかの小遣いと、小川町辺りの食堂で、白ごはん焼き魚を週2～3回は食べられたものです。

◇学生運動のはじまり

忘れられないのは、第一回「鹿児島県学生決起大会」と、それに続く学生逮捕事件です。当時、市内に旧制の高等学校と専門学校が十校（七高・農専・師範・青年師範・医専・医大予科・水専・工専・経専・女専）ありました。それらの学生が大正会館（西本願寺別院の角にあった）に集まって大会をやることになったのです。大会スローガンは「授業料値上げ反対」と「アメリカ軍事基地化反対」でした。その議長に私が担ぎ出されて議長をつとめたのです。

大会は、トラブルもなく終わりましたが、翌朝未明に農専の「對岳寮」が検察・警察合同の家宅搜索を受けて、急進派の数人が連行されました。私も覚悟しておりましたが何事もなく、逮捕者は工専の自治会委員長のみでした。

(あらた同窓会 元評議員)



回顧

岩 元 泉

(旧賛助)



農学部創立 100 周年から早いもので 10 年たったということだが、ずいぶん昔のことものようにも思える。2009 年 6 月に農学部長を拝命したが、それ以前から副学部長として創立記念事業や学部改革など学部の運営に携わっていたから、スムーズに職務は引き継げたと思う。ここでは 100 周年事業に関連した事柄や、学部改革などにも触れてみたい。

100 周年記念事業はあらた同窓会と農学部の共同事業であった。募金活動や記念誌の作成、祝賀会の開催など主要な事業はあらた同窓会が主体となって行っていた。農学部では、各学科から 3 名の実行委員による実行委員会で、記念式典当日に実施するアグリカレッジや、学部開放、公開事業、収蔵品の展示、写真展示などの検討を行ったが、あまり知られてないこととして、市電の窓吊り広告に 2 か月間、アミュプラザの電光掲示板に 1 日 14 回 1 ヶ月の「鹿児島大学農学部開学 100 周年を迎えました」とする広告を行った。効果があったかどうかは判らない。事務的に苦労したのは、これらの経費を学部予算で行うか、あらた同窓会の募金にお願いするか、だったと記憶している。さて、記念事業や記念式典は滞りなく終えることができた。一つだけ思い出したのは記念式典で当時の伊藤祐一郎鹿児島県知事がずいぶんとくだけた挨拶をし、いささか不快感を覚えたことである。

翌 2010 年 3 月 5 日に演習林開山 100 周年の記念行事が行われた。その挨拶の下調べでなぜ鹿児島大学演習林が 3000ha の規模を誇っているかを知った。大正時代に水原（スオン）、台北、鳥取、三重、宇都宮、岐阜、宮崎に高等農林学校が設立された際に、演習林の規模が問題となり、新設校については 500ha を標準とすることとなったことを受けて、格段に大きかった鹿児島高等農林学校の演習林の面積縮小が問題となった。しかし「3000ha は国有林の一担当区画面積である。したがって、学生実習、演習の場とし

ての最小規模である」との玉利喜造校長の主張が通って守られた、ということだった。広大な 3000ha の演習林に根拠があったことを知ったのは嬉しく、玄関前の記念植樹も大きく育っている。

高等農林学校の関係では、ある時建物解体業者から第 5 代校長谷口熊之助氏の常磐町の旧宅を解体したところ書類一式が出てきたので、買い取ってもらえないかとの相談を受けたことがある。古い記録や手紙類だったが、素人では判断しかねることもあり、法文学部の丹羽謙治教授に鑑定を依頼した。丹羽先生のご意見は、前任の第 4 代校長小出満二氏への手紙などの貴重なものもあるが、一括して保存するのが望ましいとの助言をいただき、なんとか工面して買い取った。

高等農林関係の資料を中心に農学部内に「農学部百周年記念資料室」を設置することとなった。その看板が必要だということで、文字を書いてもらいたいと事務職員から頼まれて、どうしたものかと思案し、自宅で新聞の広告紙の裏紙を糊でつないで、筆と墨を買ってきて、ともかく書いた。そうしたらそれがそのまま看板の文字となった。これには驚いた。いまでも「資料室」の前を通ると、へたくそな看板に目をそむけたくなるほど恥ずかしい。

最後に、学部改革は 1997 年の改革以降、課題となっており、2001 年から何度となく改革案が提案されたが、実現していなかった。私の学部長としての使命も学部改革にあると考え、ワークショップなどにも取り組んでみたが思うようには進まなかった。2011 年 3 月に年代別の教員で構想委員会を立ち上げ、学部長室で打ち合わせをした。終わったところで事務職員が飛び込んできて、テレビを見てくださいという。東北大震災の津波がまさに田畑や街を飲み込もうとしているところであった。私の改革構想も震災とともに碎け散った。

(平成 21 ～ 24 年 農学部長)



私と同窓会

富 永 茂 人

(園・昭48年卒)



私は、昭和44年にできたばかりの園芸学科の第1期生として入学しました。当時の園芸学科は学年進行で研究室が発足し「果樹園芸学研究室」には当時、農林省園芸試験場果樹部長をされていた大畑徳輔教授が赴任されたばかりで、小倉弘司先生が「蔬菜園芸学研究室」の教授をされていました。当時、農業の中では有望であった‘みかん農家’の長男であった私は「果樹園芸学研究室」に入りました。その頃にカリフォルニア大学留学を終えたばかりの新進気鋭の研究者として岩堀修一先生が東大から助教授で赴任されました。「果樹園芸学研究室」の研究圃場は郡元から2kmほどの地にある「唐湊果樹園」が主で、当時は温州ミカンが中心でカキ、モモなどは植栽されていましたが、鹿児島の特産であったポンカンはありませんでした。そこで、大畑・岩堀先生のかかけ声で、鹿児島県の普及員研修で来ておられた方や同級生と一緒に枕崎のポンカン農家から成木をトラックで運び、移植を行いました。このように、先生方や同級・下級生と一緒に研究の基礎になる作業をすることは「果樹園芸学研究室」の伝統になっており、その後の「果樹研究室同窓会」が盛会に行われている基礎になっています。

私は、学部卒業後大学院に進学しましたが、園芸学専攻の設置が1年遅れ、農学専攻修了になっています。大学院修了後、幸運にも国家公務員試験上級職に合格し、農林省に入省し、四国農業試験場⇒果樹試験場興津支場でカンキツの栽培生理と育種の研究をしていました。昭和58年に「果樹園芸学研究室」の講師として採用され、定年退職した平成27年まで研究・教育を行い、鹿児島県を中心とした地域の果樹産業に微力でも役立ちたいと産地にでかけました。このように、今の私があるのは大学・大学院時代のお二人の恩師と農林省での上司や仲間のおかげです。

大学に勤務し始めてすぐに「あらた同窓会」の学内幹事をし、その翌年「農学部開学75周年」事業が

行われ、何も分からないまま手伝ったのを記憶しています。当時は「あらた同窓会会員」に松形祐堯宮崎県知事（林・昭14年卒、当時のあらた同窓会長）と香月熊雄佐賀県知事（化・昭11年卒）のお二人がおられ、75周年祝賀会では鎌田要人鹿児島県知事も交えた対談がおこなわれたことも印象に残っています。このように、学生時代には「鹿児島大学農学部あらた同窓会」のことをほとんど知りませんでした。九州のお二人の知事だけでなく、日本でも有名な農業関係の研究者の方々が多数おられ、「あらた同窓会」の伝統と人脈に驚きました。

「開学75周年記念事業」では「開学25周年記念事業」で建築された総屋久杉作りの「あらた記念会館（平屋和室）」の大改修・清掃が行われたことも印象的でした。

25年後の「鹿児島大学農学部開学100周年」では、当時の赤崎義則会長（農・昭23年卒、元鹿児島市長）を中心に副会長をはじめ同窓会の主要な先輩方が総括班、記念誌班や式典班としての重要な役割を果たされました。私は施設整備班の責任者として、あらた記念会館・あらた同窓会館～たまり池の整備や改修に関わりました。

鹿児島高等農林学校⇒鹿児島農林専門学校⇒鹿児島大学農学部へと変遷してきた農学部は昭和44年の園芸学科設置までは研究・教育の専門性を深化（進化）する形で学科の改変・新設を進めてきましたが、平成2年の生物生産・生物資源化学・生物環境の3学科+獣医学科への改組を機に新たな改組の時代になってきました。その後の平成の改組については岩井久氏（農・昭55卒）が詳細に記載されています。私も平成27年3月の定年退職まで関わってきました。

大学は、本来研究を基礎として研究成果を教育に生かすという「教育・研究」が主体とみられてきましたが、最近では地域貢献が大学の大きな役割としてクローズアップされています。特に、鹿児島県は日本でも有数の農業県なので、鹿児島大学農学部が地域に果たす役割はますます大きくなっています。

私は、鹿児島大学農学部で育てられ、今に至っています。これからの人生を鹿児島の農業と地域社会の発展に捧げたいと考えています。同時に「鹿児島大学農学部あらた同窓会」にも微力ながら関わって行きたいと思っています。

(あらた同窓会 常任副会長、平成24～27年農学部長)

平成に行われた学部・研究科改組 (特にこの10年間の変化)

岩 井 久

(農・昭55年卒)



明治41年に創設された鹿児島高等農林学校は、第二次世界大戦後から今日まで、時代の変化に応じながら数々の組織再編を行ってきた。先ず、昭和24年の学制改革に伴い農学、林学、蚕糸学、農芸化学、獣医学の5学科および農場・演習林・家畜病院の附属施設を持つ鹿児島大学農学部となった。昭和26年には実践農業の研究・教育を謳った総合農学科が設置されたが、その後の日本の急成長下での農業構造の変革に対応すべく、昭和38年に蚕糸学科と総合農学科は発展的に改組され、それらの教育・研究は、農学科の3講座と新設された畜産学と農業工学の2学科へと引き継がれた。さらに、国民の食生活の多様化やゆとりある生活指向、また鹿児島の暖地特有の環境を背景に昭和44年に園芸学科が新設された。また一方で、社会が求める高度技術を有する人材を養成するため、大学院として農学研究科(修士課程)が昭和41年に、また博士課程の鹿児島大学大学院連合農学研究科が昭和63年に設置された(博士課程は当初、佐賀大学、宮崎大学及び鹿児島大学の3大学4研究科によって構成されたが、その後の紆余曲折を経て、現在は、佐賀大学、琉球大学、鹿児島大学の3大学4研究科による構成となっている)。

そして平成を迎えるが、残念ながらこの時代はバブルの崩壊で幕を開けた。全国の総合大学では、学部・分野を問わず教育の高度化・学際化・国際化を謳い文句に、融合・統合化を手段とする改組が始まった。しかしその真意は、来る少子化をにらみ高等教育への国庫負担を減らし、法人化(半民営化)を見据えるものであった。そして、経済界トップが誘導し政府与党が謳った大学の「機能強化」とは、すなわち定員削減のための便法であったことが後に判る。当学部では先ず手始めに、平成2年の学部改組で、獣医学科を除く6学科が3学科(生物生産学科、生物資源化学科、生物環境学科)に再編され、平成9年には講座編成改革(学科間での講座移動)が実施さ

れた。以上ここまでの歴史は、平成22年に発行された鹿児島大学農学部開学100周年記念誌「あらた百年の歩み」の131～169頁に詳細に述べられているので参照されたい。

この小文では、それ以降の変遷について特に現在行っている大学院の改組を中心に述べたい。平成23年には、県の代表物産である焼酎の製造技術の高度化ならびに発酵食品の開発や機能に関する総合的な教育・研究を推進する寄付講座を核として、附属焼酎・発酵学教育センターが新設された。そして平成24年には、獣医学科が山口大学と合体し共同獣医学部として分離独立した。また、グローバル人材を養成すべく平成27年には、水産学部と連携した国際食料資源学特別コースが設置された。さらに農学部は、平成28年にも学科を改組し、農業生産科学科、食料生命科学科、農林環境科学科として新生し現在に至っている。

しかし修士課程のその後については、学部と連動した年次進行での改組が繰り返されたものの、自立的な教育体系の再編は成されていなかった。この修士課程については、平成31年度より、まったく新しいコンセプトでの教育をスタートさせることになっている。すなわち、社会からの要請が高い農学と水産学の両分野にまたがる高度な知識を有する人材を養成するため、既存の農学研究科3専攻と水産学研究科5分野を統合し、4専攻からなる大学院農林水産学研究科を設置する。ただし、農学と水産学の両学部は、現行通りの教育組織を堅持し、専門基礎教育を担保する。農学系で3部局(農学、水産学、獣医学)を擁する国立大学法人は、本学と北海道大学のみであり、地域貢献を標榜する本学の大きな特色でもある。3部局が独立していることは、鹿児島大学の将来戦略上重要である。新研究科は既に10月30日と1月23日に入試を完了し、ほぼ定員にとどく1期生が入学してくる予定である。目下は運営体制の始動に向け、関連する全教職員の協力のもと規則等の整備を急ピッチで進めている。

末尾の図に農林水産学研究科の全体像を示す。食品創成科学専攻は、食品科学、先端生命科学、焼酎発酵・微生物科学の3コースで構成する農水融合型の専攻で、食品・生命科学関連産業において指導的立場での解決能力を有す人材を養成する。環境フィールド科学専攻も融合型で、生物環境科学と環境シス

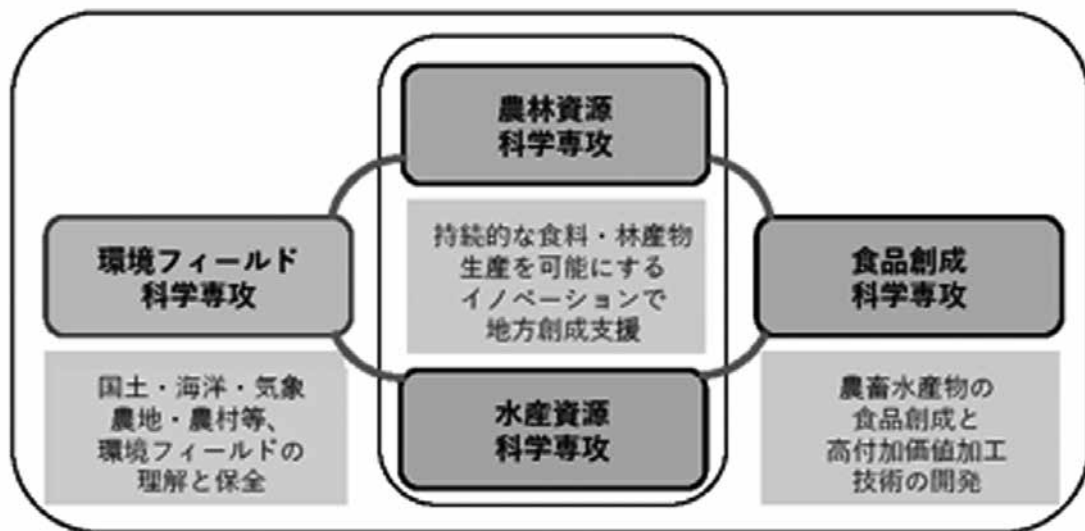
テム科学の2コースで構成され、南西諸島や南九州陸海域の環境保全、生産環境・基盤に関する実践的知識と先進技術を身につけた、地域社会で中心となる人材を養成する。農林資源科学専攻は植物生産科学、畜産科学、森林科学、食料農業経済学の4コース、そして水産資源科学専攻は生物資源科学、増養殖学、環境保全学、流通・政策学の4コースで構成され、それぞれの専攻は、伝統分野を継承しつつも、その一方で、農林水産業分野でのIoT（Internet of Things; モノのインターネット＝全ての作業機械や生産現場がネットで繋がり情報収集やオペレーションができるコンセプト）を図る教育・研究をより強力に進め、Society 5.0（仮想空間と現実空間を融合させたシステムにより経済発展と社会的課題の解決を両立する社会）を具現化し、地域や国際社会で農林水産業の発展に貢献できる人材を養成する。新年度からの修士課程教育に期待されたい。

また、この間に農学部では正規の授業とは別に、主に社会人向けに「地域力」を高めることを目的として、総時間数120時間以上の講義・演習等を体系

的に編成した3つのプログラムを新設し遂行してきた。それらは、焼酎マイスター養成コース、林業生産技術者養成プログラムならびに食品管理技術者養成コースである。これらは鹿児島大学の生涯学習部門が実施する履修証明プログラム（かごしまルネッサンスアカデミー）に位置づけられるが、関連分野教員の多大な協力の元に、南九州・南西諸島域の地域活性化、地域力の創造に貢献できる人材の育成を行っている。

以上述べたように農学部はこの10年間、常に地域・国際社会の動向や要望を見据えつつ、改組や再編成を進めてきた。これらの改革は、農学部の全教職員ならびに学生・院生の方々の理解や協力無くしては成し得なかったものであり、心より感謝する次第である。農学部が、今後も鹿児島大学が標榜する「社会との連携」の基幹部局としての使命感を堅持しつつ、教育・研究を遂行していかれんことを信じて、小文を終わる。

（あらた同窓会 元幹事、平成27～31年農学部長）



平成31年に新設する農林水産学研究科の全体像

編 集 後 記

今年も多く of 農学研究科院生、農学部学生があらた同窓会の一員として巣立っていきます。私も農学部 of 教員を 30 年以上務めていますので、この年齢になりますと、高校、大学 of 同級生の中には、好むと好まざるとにかかわらず、所属する組織で上層部に位置する者も多くいます。教え子を送り出す側として、私が彼らに必ず訊くことがあります。それは、「どんな人材を採用するのか？」ということですが、こちらとしては学生 of 就職指導 of 参考にと明快な答えを期待するのですが、残念ながら「コミュニケーション力」、「積極性」、「協調性」など、何だかわかったようで、実はよくわからない返事しか戻ってきません。一つ印象に残った答えは、民間企業 of 友人からでした。「仮に就職してから定年まで 40 年として、会社が社員一人に支出する経費（給与や研修など）は数億円を超える。そう考えると、選ばれるほうは必至だろうが、選ぶほうは命がけだ。」

売り手市場と言われる昨今、皆さんどうお考えになりますか。

（文責 附属農場 遠城道雄）

鹿児島大学農学部 あらた同窓会

〒890-0065 鹿児島市郡元一丁目 2 1 - 2 4

TEL・FAX 099(285)8537

e-mail(arataakai@mc2.seikyo.ne.jp)

振替口座 02010-2-876

事務局の業務日 月・水・金(10:00～16:00)

印刷所	株式会社鹿児島新生社印刷
住所	鹿児島市七ツ島 1-1-1
TEL	099-261-0111
FAX	099-261-3100
E-mail	kagoshima@shinsei-p.co.jp



鹿児島大学農学部全景